

## 論 文

## 『桑華蒙求』概略・出典覚書（中巻）

本 間 洋 一

同志社女子大学  
表象文化学部・日本語日本文学科  
教授The outline and source of *Sokamogyu*

Youichi Honma

Department of Japanese Language and Literature,  
Faculty of Culture and Representation, Doshisha Women's College of Liberal Arts,  
Professor

## 【緒言】

本稿は前稿（『同志社女子大学学術研究年報』第六十三巻、二〇一二年  
一二月）の続稿であり、二〇一一年度個人研究助成（『桑華蒙求の研究』  
による成果の一部である）。

【キーワード】 蒙求 人物故事 日中対照 漢学教養書

## 1 冉尊感鵠

伊弉諾尊と伊弉冉尊は交合し国を生まんとするもその術を知らず、そこに鵠鵠が  
飛来り、首尾を揺がす様を見て交わることができた。

出典は『日本書紀』（巻一・神代上・第四段）であろう。但し、『日本紀略』（前  
篇一・神代上）『帝王編年記』（巻一・天神（伊弉冉尊））も『書紀』と殆ど同文で  
あり、『古今著聞集』（巻八・好色第一・序）にも見える。

## 2 簡狄吞鵠

殷の契の母簡狄は有娥氏の娘で、帝嚳の次妃である。女三人で水浴をしている時、  
鵠（玄鳥）が卵を生み落としたのを見、狄がそれを呑んで孕み契が生まれた。彼  
は成長して禹の治水事業を助けた。帝舜は「人々が互いに親知せず、五品（父母兄  
弟子）の秩序が乱れている。司徒となり五教（義慈友恭孝）を徐々に天下に弘め  
よ」と彼に命じ、商に封じ子氏の姓を賜った。契は唐虞大禹の時に起こり功業著し  
く、民生は安定した。

出典は『史記』（巻三・殷本紀第三冒頭）。部分的には『十八史略』（巻一・殷  
（殷王成湯））や『芸文類聚』（巻一〇・符命。『史記』所引。巻九二・燕。『列仙  
伝』・所引）『太平御覧』（巻九二二・燕。『史記』所引）『円機活法』（巻二三・燕）  
『事文類聚』（後集巻四五・燕）『測鑑類函』（巻四二四・燕二。『列仙伝』所引）等  
の類書にも見える。

## 3 鈿女俳優

天照大神が天石窟に隠れたので、天鈿女命はその前で滑稽な俳優をした。その  
声を聞いた大神は、常夜のはずなのに鈿女がどうして戯れ楽しみ笑うのかと思ひ磐  
戸を細めに開けると、手力雄神が大神の御手を引きだした。

出典は『日本書紀』（巻一・神代上・第七段）で、その本文と「一書曰」の記事  
を交えて成文化しており、『日本紀略』（前篇一・神代上）も殆ど同文。猶、『本朝  
蒙求』（巻上・100鈿女俳優。巻中・73手力引手）も同内容だが直接の典拠ではある

まい。

#### 4 伶倫呂律

黄帝は伶倫に命じ、嶰谷の竹を取り竹管を作らせ、十二音の鳳鳴の音を定め、十二律（六律六呂）の音階に当てた。これが音調の基準となった。

出典は『漢書』（巻二一上・律曆志第一上）か。猶、この故事は他に『芸文類聚』（巻五・歳時下・律。『呂氏春秋』所引）『太平御覽』（巻一六・律。卷九六二・竹上。共に『呂氏春秋』所引）『事類賦』（巻二四・竹。『呂氏春秋』所引）『事文類聚』（後集巻二四・竹）『円機活法』（巻二二・竹。『呂氏春秋』所引）等の類書や『十八史略』（巻一・三皇（黄帝軒轅氏）などにも見えている。

#### 5 蟬丸蘂屋

蟬丸は仁明帝代の人だが出自不明、古の隠者であろう。相（逢）坂に庵を結び琴瑟琵琶や和歌をよくし、「世中とはともかくても同じ事宮も蘂屋も果てしなれば」の詠あり、平素手にする琵琶は無名という。深草（仁明）帝は良岑宗貞に命じて和琴を習いにやらせた。相坂の関の明神は蟬翁であるという。

出典は『本朝蒙求』（巻下・20蟬丸琵琶）。文中の和歌は『和漢朗詠集』（巻下・述懐763）『俊頼髓脳』（和歌童蒙抄）（第五）『古本説話集』（上・蟬丸の事第二四）『新古今和歌集』（巻一八・185）『源平盛衰記』（巻四五・内大臣関東下向附池田宿遊女君歌の事）『楊鳴曉筆』（第三・蟬丸）等にも引かれ、無名の琵琶のことは『教訓抄』（巻八・管絃物語・絃類・琵琶）にも記され、相坂の関の明神のことは『無名抄』（巻上・関明神）や『神社考詳節』（関明神）などにも見える。よく知られるように蟬丸説話は『今昔物語集』（巻二四・源博雅朝臣行二会坂盲許一語第二三）『無名草子』（33兵衛の内侍）『平家物語』（巻一〇・重衡東下り）『源平盛衰記』（巻三一・青山の琵琶流泉啄木の事）等の諸書に見えて、『本朝遼史』（巻上）『扶桑隠逸伝』（巻上）『本朝列仙伝』（巻二）『本朝語園』（巻三・87蟬丸非盲人）『絵本故事談』（巻七・蟬丸）『扶桑蒙求』（巻中・5蟬丸琵琶）『百人一首一夕話』（巻二・蟬丸）『日本蒙求初編』（巻上・蟬丸秘曲）等にも受け継がれている。猶、『絵本故事談』の記事の前半は本書の記事を利用していいよう。博雅三位との関連は本書上巻（59博雅琵琶）参照。

#### 6 禹錫陋室

劉禹錫は進士となり博学宏辭科に合格。文章巧みで「陋室銘」を作して「山は高

くなくとも仙人がいれば有名となり、水は深くなくとも神龍がいれば霊名あり。わが陋室（狭い部屋）には徳がかおり、増上には緑苔、簾越しに青々とした草、談笑する鴻儒の客などあり、素琴を奏で聖典に親しみ、俗曲や公案文書に煩わされることもない。諸葛孔明や揚雄の居にも似ているわが部屋は、孔子の言うようにどうして狭いことがございましょう」と言う。

出典は『古文真宝後集諺解大成』（銘類・「陋室銘」）であろう（『箋解古文真宝後集』巻五にも所収）。

#### 7 夏井留二

紀夏井は美濃守善岑の第三子。容貌美しく身長六尺三寸、温和で母に仕えて至孝。才思あり隸書に巧みで、文徳帝の詔で小野篁に書を学び、「紀三郎は真書の聖なり」と称嘆さる。仕えては冠服粗悪で笑われることもあったが帝の恩寵をえた。讃岐守として大いに功あり、民も慕って、任満ちたるも留まること二年、豊かな収穫があり倉四十棟を新造す。帰任の贈物は紙筆以外は一切受け取らず返した。占いをよくし医術も巧みで囲碁は無敵であった。

出典は『三代実録』（貞観八年九月二日卒伝）か、それを引用する『本朝語園』（巻二・68夏井多芸）あたりであろうか。彼のことは他に『本朝孝子伝』（巻上・12紀夏井）『本朝儒宗伝』（巻下・紀夏井）などにも見える。

#### 8 寇恂借一

後漢の寇恂は上谷昌平の人。光武帝は彼を河内太守に任じ大將軍の事を行わせ「高祖は蕭何を留めて関中を治めさせたが、吾は公に河内を任せ、軍糧を足らしめ士馬を督励して守らせる」と言った。後に潁川太守や執金吾となる。潁川に盜賊の起こるや、帝に親征を促し悉く帰順させた。恂はその郡の長官を拜命していなかったが、百姓は道を遮って「どうか寇恂様を一年間拝借させて下さい」と帝に願い出した。それで留まり治めることとなった。

出典は『後漢書』（巻一六・鄧寇列伝第六・寇恂）。猶、『十八史略』（巻三・東漢（世祖光武皇帝））にも言及されている。

#### 9 武尊築波

日本武尊は蝦夷を平定し、甲斐の酒折宮に火をともし食事をとった。侍者に「にひばりつくはをすぎて幾夜かねつる」と問うが答える者はない。燭をとる者がその歌に続けて「かがなべて夜には九夜日（このよ）には十日を」と詠ったので、嘉して褒美を与

え、<sup>（おげいのもの）</sup> 靱部の職を大伴連の遠祖武日に賜った。

出典は『日本書紀』（巻七・景行天皇四〇年は歳条）。『日本紀略』（前篇四・景行天皇四〇年は歳条）にも見える。

## 10 漢武柏梁

漢武帝の元封三年に柏梁台を作り、群臣二千石のよく七言詩を作る者に座を与えた。詩は毎句に韻を用い、後人はこれを柏梁体と言う。聯句の起源である。

出典は『古詩源』（巻二）か。柏梁台聯句については『芸文類聚』（巻五六・詩）『円機活法』（巻五・台。巻一一・詩）『文体明弁』（巻一六・聯句詩（七言古詩・述懐・柏梁詩））『古文苑注』（『古詩紀』（巻二）『古今詩刪』（巻六）『古詩韻範』（『全唐詩話』（『日知録』（芸文・柏梁台詩）『陔餘叢考』（柏梁体）『淵鑑類函』（巻一九八・詩四）等諸書に見える。鈴木虎雄「柏梁台の聯句」（『支那文学研究』弘文堂書房・一九六七年）参照。

## 11 弟媛衣通

衣通<sup>（そとより）</sup>郎姫は允恭帝の皇后忍坂大中姫命の妹で弟媛といい、容姿比類なく、その艷色が衣に通りがやいたので衣通姫と言われた。帝に寵愛され、姉皇后が嫉妬したため、河内の茅渚<sup>（ちぬ）</sup>に居を与えられ、帝もそこをしばしば訪れた。

出典は『本朝蒙求』（巻上・70衣通徹見）。他に『日本書紀』（第一三・允恭天皇七年二月、八年二月）『日本紀略』（前篇五・允恭天皇七年）『水鏡』（巻上・允恭天皇）『扶桑略記』（第二・允恭天皇七年）『和歌色葉』『本朝神社考』（中之三・玉津嶋明神）『女郎花物語』（巻上・25衣通姫の事）『本朝女鑑』（巻一・衣通姫）『雑々集』（28そとをり姫）『本朝列女伝』（巻一〇・衣通姫）『本朝美人鑑』（巻一・衣通姫）等にも見え、後の『瓊矛餘滴』（巻上・弟姫光彩）にも受け継がれている。

## 12 寿陽梅粧

宋の武帝の娘寿陽公主が人日に含章殿の簷下に臥していると、梅花が額の上に散り落ち雪の花のようになり、梅花の化粧が誕生した。

出典は『円機活法』（巻二〇・梅花）か。他に『太平御覧』（巻三〇・人日。『雑五行書』所引。巻九七〇・梅。『宋書』所引。『事類賦』（巻二六・梅。『宋書』所引。『文鳳抄』（巻八・梅）『事文類聚』（前集巻六・人日）『書言故事』（巻五・身体譬類）等にも見える。

## 13 聖武鑄造

聖武帝は仏教を崇め東大寺を創建、盧舍那仏の銅像を鑄造し、発願の疏を作り天下に布告した。天平勝宝元年十月に大像成ったが、三年をかけ改鑄八度であった。

出典未詳。但し大仏鑄造のことは『続日本紀』（巻一五・天平一五年）『扶桑略記』（巻六・聖武天皇上。『扶桑略記抄』第二・聖武天皇下・孝謙天皇）『元亨釈書』（巻二一・資治表三・聖武）等諸書に見える。

## 14 梁祖建堂

梁の高祖武帝（蕭衍）は達摩大師<sup>（だま）</sup>に「即位以来造寺写經度僧經を行うこと数知れないがどんな功德があるか」と問うた。無いと答える師に、更にいかなるものが真実の功德かと問うと、淨智妙円・礼自空寂と答えた。

出典は『景德伝燈録』（巻三・第二八祖菩提達磨）か。猶、梁武帝の説明は『十八史略』（巻四・南北朝（梁高祖武帝））の冒頭と重なる。

## 15 季仲黒帥

藤原季仲は実頼の子孫、中納言となり康和四年六月に太宰（権）帥となった。顔面黒き故に時人は「黒帥」と呼んだ。長治二年十一月に常陸に移された。

出典は『本朝蒙求』（巻中・129季仲黒帥）。猶、この逸話は『平家物語』（巻一・殿上閣打）『源平盛衰記』（巻一・兼家季仲基高家継忠雅等拍子附忠盛卒する事）『本朝一人一首』（巻八・394藤原季仲）などにも見え、後に『見聞談叢』（巻四・307大江匡房）などにも受け継がれている。

## 16 何晏粉郎

何晏は色白の美男子で、余りの白さに魏明帝は白粉を付けているのかと疑い、真夏の最中に熱湯の餅を食べさせた。食後大汗をかいいたので朱衣で顔をふいたところ、色白の顔はいよいよ白く輝いた。

出典は『世説新語』（巻下・容止第一四・2）であろう。この故事はよく知られ、他に『三国志』（巻九・魏書第九・何晏伝）『初学記』（巻一〇・駙馬第七。『魚豢魏略』所引）『北堂書鈔』（巻一二八、一三五）『太平御覧』（巻三七八・美丈夫上。『語林』所引）『事文類聚』（後集巻一七・餅湯餅付。『語林』所引。後集巻一八・頭面）『潜確居類書』（巻一三・容止）等でも知られる。同じ話柄なのに『蒙求』（259「平叔傅粉」）の本文を直接利用してはいないようだ。

## 17 蛭子滄海

伊弉諾尊と伊弉冉尊は磯敷いそしき盧島ろしまを作り、天照大神や月神を生み、次に蛭児ひるこを生むも、三年にして立たなかつたので船に乗せて流し棄てた。

出典は『日本書紀』（巻一・神代上・第四四五段）。『日本紀略』（前篇一・神代上）にも見え、『本朝蒙求』（巻中・12蛭児輩船）と同じ話柄だがその本文を用いてはいないようだ。

## 18 鼈令江流

鼈令が死に、屍は流れて成都に至り、蜀王杜宇に見えて相となる。杜宇（望帝）はわが徳は彼に及ばずとして国を禪譲した。

出典は『蒙求』（92「鼈令王蜀」）。猶、本書上巻（4望帝杜鵑）参照。

## 19 道臣設宴

神武天皇は国見丘に八十梟帥やそたけらを討った後、道臣みちのおみ命に殘党狩りを命じた。彼は忍坂村に大きな室を作り、敵の殘党をだまして宴を設け、酒酣わにして自らが起ち舞うのを合図に、配下の者に敵を皆殺しにさせた。

出典は『日本書紀』（巻三・神武天皇即位前紀戊午年一〇月）。他に『日本紀略』（前篇三・神武天皇即位前紀）にも見える。

## 20 張良運籌

張良は下邳かひの圯上で一老父に遇い、王者の師となる太公の兵法書を授けられた。兵法を漢高祖に説き策を入れられ、高祖は作戦をめぐらし勝利を千里の外に決したのは張良の功だと賞し、留侯に封じた。

出典は『蒙求』（527「子房取履」）でその抄引か。猶、張良のこの故事は『史記』（卷五五・留侯世家第二五）や『漢書』（卷四〇・列伝第一〇・張良）などにも見え、『十八史略』（巻一・西漢〈太祖高皇帝〉）にも関連記事がある。

## 21 菅相止狩

菅原道真是藤原時平と共に天子の輔佐となったが、宇多上皇が彼の才を特に帝に奨めたので、時平らの謀略により太宰府に左遷された。宇多帝の時殺生を禁じたものの、次年には頻りに帝が遊獵されたので、道真是奏上してやめさせた。

出典は前半が『本朝神社考』（上之二・北野）で、止狩の故事は『続古事談』（第一・王道后宮・29、菅原道真、宇多帝を諫言し、三善清行、道真を諫言する事）か、

それを継承している『本朝語園』（巻一・人臣・58菅相止御狩）であろう。また、『本朝儒宗伝』（巻中・大臣・菅原道真）『読史餘論』（巻一・上）にも見えている。

## 22 申屠諫遊

後漢の申屠剛は正直な人で、賢良方正科に挙げられ、答案を提出したが、王莽には耳障りな内容だったので官を解かれた。後に光武帝の時に召し出されたが、帝の出遊を諫止するなどして御機嫌を損ね、平陰令に出され大中大夫となった。

出典は『蒙求』（410「申屠断袂」）。猶、申屠剛のこの故事は『後漢書』（卷二九・列伝第一九・申屠剛）や『君臣故事』（句解卷一・諫争類・「軻輪諫遊」）『日記故事大全』（卷六・忠諫類・「頭軻輿輪」）『十七史蒙求』（巻一・申屠軻輪）等にも見えている。

## 23 頼員泄事

後醍醐帝が平家討伐を企て、土岐頼員は頼貞・多治見国長らと共にその陰謀に加わったが、彼は臆病で次第を妻の斎藤氏に語ったため露見し、六波羅の将帥らにより頼貞・国長は討たれ、帝は蒙塵した。

出典は『太平記』（巻一・頼員回忠事）。『増鏡』（第一四・春の別れ・正中の変）でも簡略にこの正中の変に言及している。

## 24 盧蒲告謀

斉の慶封は狩と酒を好み、政治は子の慶舎に任せた。盧蒲葵の妻姜氏は慶舎の娘で、かねがね夫に「事ある時は私に打ち明けなさい。さもないと失敗するわよ」と言っていた。そこで夫の葵が父の慶舎を攻めるのに加担すると話すと、父の性格を知りつくした妻が助けてくれて、慶舎を殺すことができた。

出典は『春秋左氏伝』（襄公二八年）。

## 25 県守斬虬

仁徳天皇の御代に吉備国の川島河にミズチが出て人を苦しめ、毒で多くの人が死んだ。そこで勇悍強力の笠臣祖県守は剣を手に渕に入りミズチを斬った。そこを県守渕という。「虬」は「虯」に同じ。猶、本文に「川鳴河」とあるが「川嶋河」が正しい。

出典は『本朝蒙求』（巻下・27県守斬虬）。この話は『日本書紀』（巻一一・仁徳

天皇六十七年は歳条)『扶桑略記』(第二・仁徳天皇六十七年)『日本紀略』(前篇五・仁徳天皇六十七年は歳条)などや『本朝語園』(巻六・武勇・288 県守斬虬)にも見えている。

## 26 周処殺虎

晋の周処は並外れた力持ちで、世間並みの振る舞いをしなかったため、村人達は迷惑していた。父老の三害を聞いて憎まれていることを悟った彼は心を改め励まし、猛虎と蛟を除き、学を修め義烈・忠信を期した。

出典は『蒙求』(28「周処三害」)か、『晋書』(巻五八・列伝第二八・周処)。猶、三害の故事そのものは、『世説新語』(自新第一五・1話)『芸文類聚』(巻九六・蛟。『世説』所引)『太平御覧』(巻三八六・健。『世説』所引)『事文類聚』(後集巻三三・龍。『世説』所引)『日記故事大全』(巻二・感勵類「改勵除害」)『測鑑類函』(巻四三八・蛟。『世説』所引)等にも見える。

## 27 佐国蝴蝶

大江佐国はとても花を愛した人で長樂寺や雲林院での花の詠があり、庭前の桜を詠じ、手ずから植えた梅が開いたと詠じ、晩年の吟でも「六十余回看不足、他生定作「愛花人」」などと詠んでいる。没後はその子の夢に現れ、蝶になつていてと伝えたので、子は春になると花房に蜜をぬつて蝶に供したという。

出典は『本朝蒙求』(巻中・39佐国化蝶)。猶、この話のとは『発心集』(巻一・8佐国花を愛し蝶と成る事)で、『史館茗話』(94話)がこれを受け、それは更に『本朝語園』(巻四・164佐国愛花)と『本朝蒙求』に影響を与えることになる。

『本朝蒙求』『桑華蒙求』が佐国を出自不明としたのは『本朝一人一首』(巻六・281大江佐国)を見ていなかったためであろうか。文中に挙げられている詩は『本朝無題詩』所収。

## 28 禰衡鸚鵡

後漢の禰衡は若い頃より才弁あり、傲気を尚んだ。曹操の招きに赴かず、その忿りをかうも才名を惜しまれ殺されずにすんだ。黄射は衡と仲良しで、客人を招き宴会を催した。その時鸚鵡を献ずる者がいて、衡に作賦を望んだので、筆を認め立ちどころに彩麗なる作を成した。後に黄祖(射の父)に殺された。

出典は『和刻本文選』(巻二三・「鸚鵡賦」)の作者名「禰正平」に付された李善注(『蒙求』556「禰衡一鶚」の一部も参看か)。この故事は『後漢書』(巻八〇下・

文苑列伝第七〇下)『太平御覧』(巻九二四・鸚鵡)『事文類聚』(後集巻四三・鸚鵡。「作」賦見「忘」)『金壁故事』(巻二・援筆空成「鸚鵡賦」)等諸書に見える。

## 29 東人壺碑

奥州宮城郡の壺碑(つぼのいしふみ)(多賀城碑のこと)は高さ六尺・幅三尺で、その銘に京を去ること一千五百里、蝦夷国を去ること一千二百里(「千」は衍字)……大野東人朝臣所建也(「大野朝臣東人之所置」が正しい)……とある。

出典未詳。多賀城碑のことについては『遠碧軒記』(黒川道祐著、巻下)あたりに見えるのが比較的早く、江戸後期の随筆にはよく記されている。『塩尻』(天野信景著、巻二三)『卯花園漫録』(石上宣統著、巻四)『笈埃隨筆』(百井塘雨著、巻二)『松屋筆記』(小山田与清著、巻八七)『翁草』(神沢貞幹著、巻五、四八、一一七)『好古小録』(藤井貞幹著、巻上)『年山紀聞』(安藤為章著、巻二)『年々隨筆』(石原正明著、巻二)『草廬漫筆』(武田信英著、巻二)『海録』(山崎美成著、巻二四)『古京遺文』(狩谷極斎著。「修造多賀城碑」)等諸書参照。

## 30 伏波銅柱

後漢の馬援は若くして大志あり、「困窮の時こそ堅い志を立て、老いては壯氣を保つべき」と言った。光武帝の時虎賁中郎将となり、鬚髮眉目共に美しく、礼法に通じ、戦略もよくし、伏波将軍として交趾・蛮夷を征討し新息侯に封ぜられた。交趾に到り銅柱を立て漢の領地の境界としたのは馬援である。

出典は『蒙求』(17「伏波標柱」)。猶、馬援については『後漢書』(巻二四・列伝第一四・馬援)に詳しく、その注に「広州記曰、援到交趾立銅柱一為漢之極界一也」とも見えている。

## 31 政子尼将

平政子は北条時政の女で、源頼朝に嫁ぎ頼家・実朝を生む。頼朝没後に政子は尼となり、後に従二位を授けられ二位の禅尼と称され、実朝没後は二位の尼として政を執り「尼将軍」と呼ばれた。

出典は『本朝蒙求』(巻下・11政子尼将)。政子が尼将軍として政を執ったことは、一条兼良『樵談治要』(「簾中より政務を行はるる事」)『小夜のねざめ』や『吾妻鏡』(嘉禄元年七月二日)『増鏡』(第二・新島守・摂家将軍の下向)等にも窺え、明治期の『瓊矛餘滴』(巻中・政子函鳩)『日本蒙求初編』(巻下・政子与鏡)などにも受け継がれている。猶、政子の略伝の代表的なものに『本朝列女伝』(巻二・

夫人伝・平政子）『本朝女鑑』（巻二・二位尼）などがある。

### 32 呂后女主

呂太后は漢高祖劉邦の微賤の頃からの妻で、孝恵帝と魯元太后を生んだ。孝恵帝・高后（呂太后）の時代は戦争から解放され、高后は女君として政を執り、後宮を出ずに治めて天下安泰であった。刑罰の執行や罪人もまれで、民は農務に励み衣食豊かになった。

出典は『史記』（巻九・呂太后本紀第九）。他に『漢書』（巻九七上・外戚伝六七上・高祖呂皇后）にも見える。

### 33 企儼向譬

欽明帝の二三年正月に任那が新羅に滅ぼされ、七月に大將軍紀男磨・副將河辺瓊<sup>に</sup>を派遣。瓊は転戦連勝し、新羅は白旗を揚げ降伏したかに見えたが偽りで、逆に攻めたてられ捕虜となった。同時に捕まった調吉士伊企儼<sup>つぎしいきな</sup>は勇猛で屈服せず、日本に尻を向け「日本の將、我が尻くらえ」と言えと新羅の閼將に強いられるが、「新羅の王よ、我が尻くらえ」と叫び殺された。

出典は『日本書紀』（巻一九・欽明天皇二三年正月、七月）。この話は他に『日本紀略』（前篇六・欽明天皇二三年正月、七月）にも見え、『本朝蒙求』（巻中・100佐用振巾）『本朝語園』（巻六・292河辺臣責三三韓一、293伊企儼扣三尻譬一）なども本書に近い。

### 34 秀実唾面

李希烈<sup>りしりつ</sup>の乱で、鎮圧の命を受けた姚令言の軍は、朝廷から十分な慰安が受けられず憤慨して都に乱入、朱泚を頭目に立てた。自ら皇帝に即こうとした泚の顔に、段秀実<sup>だんしゆじつ</sup>は唾を吐きかけ罵り、笏でその頭を撃ったが、殺されてしまった。

出典は『十八史略』（巻五・唐（徳宗皇帝））。猶、この故事は他に『旧唐書』（巻一二八・列伝第七八・段秀実）『新唐書』（巻一五三・列伝第七八・段秀実）や『七史蒙求』（巻一〇・段撃朱泚）『事文類聚』（続集巻一九・朝服「笏撃朱泚」）『勸懲故事』（巻三・奪笏撃賊）等にも見え、白居易「青石」詩（『白氏文集』巻四）にもこの故事が詠み込まれている。

### 35 聖徳勝鬘

聖徳太子は用明帝の第一子。その母の夢に救世菩薩が衆生救済に現れ、その胎を

借りたとい口より入ったかと思うと娘み、敏達二年正月に厩屋で誕生したが、赤黄の西光が宮中を照らした。同六年百濟より仏經論書が伝わるや、彼が昔陳国の南嶽で読んだものと言うので帝も驚く。推古三年高麗の慧慈が来り太子の師となる。一四年に帝は太子に『勝鬘經』を講じさせ、了ると天より蓮華が降ったので喜び、その地に橘寺を建て、一七年に『勝鬘經疏』が成った。

出典は『元亨釈書』（巻一五・方応八・聖徳太子）。猶、この説話に関しては、『聖徳太子伝暦』『上宮聖徳太子伝補闕記』『日本往生極楽記』（1聖徳太子）『三宝絵』（巻中・1聖徳太子）『扶桑略記』（第三・欽明天皇二三年）等の諸書に見える。

### 36 昭明文選

梁の昭明太子蕭統は『文選』三〇巻を撰し自ら序文を認めた（以下序文の後半が引用される）。

出典は恐らく『和刻本六臣注文選』（慶安五年か寛文二年刊本）であろう。

### 37 房平徳帥

藤原房平の曰く、わが心には善と悪が存し、この二者（善を味方、悪を敵とする）が戦いを行う。仁義を前軍の將、礼信を後軍の將として、日夜大敵を滅すべく努めている。たとえ妄念邪志が巧みな戦術をとろうと、明徳の帥將<sup>かしら</sup>はスキなく備えて敵は自と敗れるのだ、と。

出典は『本朝蒙求』（巻上・57房平二戦）。『本朝蒙求』は更に溯る『倭論語』（巻四・公卿部下・藤原房平）の記事を参考にしている。

### 38 関損心戦

関子騫<sup>せきけん</sup>は肥満で、子貢が「何で肥<sup>ふと</sup>っているのか」と問うと、「出かけると美しい馬車が欲しくなり、教室に入り先生の言葉を聞くとそうありたいと思う。この二つの心が共に戦って、今先生の言葉が勝つたので肥<sup>ふと</sup>っているのさ」と答えた。

出典は『太平御覧』（巻三七八・肥）か（但し、「先生」を「先王」に作る）。或いは以後の類書の可能性もある。関子騫は孝子として有名で、その故事（例えば『蒙求』<sup>296</sup>「関損衣单」）の方が諸書に見えて知られている。

### 39 加賀伏柴

待賢門院加賀は作りおいた「かねてより思しことよ伏柴のこるばかりなる歎きせんとは」を秀作<sup>しゆさく</sup>と思い、用いる機会を待っていた。花園左府源有仁と恋愛し、この

歌を用いたところ、大変賞美され「伏柴の加賀」と呼ばれた。

出典は『本朝蒙求』（巻下・25加賀伏柴）。この逸話は『今物語』（22伏柴の加賀）『十訓抄』（第一〇・11伏柴の加賀のかねてよりの歌）『古今著聞集』（巻五・和歌第六・30待賢門院の女房加賀の伏柴の歌事）『東斎随筆』（詩歌類五・37）等をへて、『女郎花物語』（内閣文庫写本巻上・13。万治四年刊本巻中・26）『本朝女鑑』（巻一〇・弁通下・5待賢門院加賀）などにも見え、本書の後にも『絵本故事談』（巻二・伏柴加賀）に録されている。

#### 40 婕妤棄扇

漢の宮女班婕妤は帝の寵愛が衰えた時、「怨歌行」（新裂齊紈素……）を作った。出典は恐らく『古文真宝前集諺解大成』（五言古風短篇所載「怨歌行」注）であろう。もっともこの作は『玉台新詠』（巻二）『文選』（巻二七）『芸文類聚』（巻二・雪。巻四一・樂府古詩。巻六九・扇）『初学記』（巻一・月。巻二・雪、霜）等、後の諸書に引用される名高い作。

#### 41 宿祢探湯

応神帝九年四月、武内宿祢を筑紫に派遣し民を監察させた時、弟の甘美宿祢が兄の謀反を帝に訴えた。忠君の身の災いと兄は慨嘆し赤心を訴え、二人は相争ったが決せず、磯城川の浜での探湯により兄の冤罪は晴れ、弟は処刑された。

出典は『本朝蒙求』（巻上・62宿祢探湯）か、その改変。他に『日本書紀』（巻一〇・応神天皇九年四月）『日本紀略』（前篇四・応神天皇九年四月）『扶桑略記』（第二・応神天皇八年四月）『水鏡』（巻上・応神天皇八年四月）などにも見え、後世の『瓊矛餘滴続編』（巻中・武内沸湯）『日本蒙求初編』（巻上・武内探湯）にも受け継がれている話。

#### 42 述古模鐘

陳述古が浦城令となった時、県に物を失くした人がいて、盗んだ者がわからなかった。彼はそこでいつわって「盗人を明らかにする鐘があり、盗人がさわると鳴る」と言い、陰かに鐘を帷で囲み墨を塗らせておいた。囚人達は中に入り鐘にさわらせられたが、一人だけ手を墨で汚していない者がいて、問い詰めるとそれが犯人だった。

出典は恐らく『潜確居類書』（巻五六・県令「墨鐘訊盗」）であろう。この故事は『事文類聚』（別集巻二三・治盜偷盜「託鐘弁盜」）にも見えている。

#### 43 田村討賊

坂上田村麻呂は八尺八寸の偉丈夫で勇烈武毅の人。延暦年間に詔を承けて東夷を討ち、弘仁元年には藤原仲成を誅した功臣である。征夷大將軍中納言に至り左近衛大將を兼ねた。

出典は『日本古今人物史』（巻一・武將・1坂上田村麻呂伝）。田村麻呂の伝には『田邑麻呂伝記』（嵯峨天皇作）『日本後紀』（弘仁二年五月二三日薨伝）等があり、『公卿補任』（延暦二〇年「弘仁二年」）で略歴も知られ、後にも『扶桑名將伝』（巻上）他の武人伝にその名を見る。

#### 44 衛青征匈奴

前漢の衛青は、平陽侯に仕えた父鄭季とその妻陽信長公主に仕えた衛嫗との間に生まれ、羽振りの良い母方の姓を名乗った。車騎將軍となり匈奴を討伐して長平侯となり、武帝の元朔年中には三万騎を率いて討って出、匈奴の右賢王を追い払い、その配下の副將十人以上と民一万五千、家畜數十百万を生け捕り帰任して大將軍を授けられた。

出典は『蒙求』（387「衛青拜幕」）。猶、衛青のことは『史記』（巻一一・衛將軍驃騎列伝第五一）『漢書』（巻五五・衛青霍去病伝第二五）などにも見えている。

#### 45 活目逐雀

崇神天皇は兄の豊城命と弟の活目命（後の垂仁天皇）のいずれを後嗣にするか夢占いで決めようとする。兄は東に向き武力を行使した夢をみ、弟は四方に縄を渡して粟を食む雀を逐う夢をみたので、弟を皇太子とし、兄には東国を治めさせることとした。

出典は『日本書紀』（巻五・崇神天皇四八年春正月）。

#### 46 肅宗見龍

唐の肅宗は春宮の時、諸王と共に玄宗に従い太清宮に詣でた折、殿の東梁に龍を見た。玄宗が「何か見えたか」と諸王に問うと皆「いいえ」と言う。太子にも問うと、彼はうつむいて答えないので、更に「頭はどこにあるか」と問うと、「東の上です」と答えた。玄宗は太子を撫で「まさに我が子だ」と言った。

出典は『江行雜錄』（宋・廖瑩中撰）か。後の『淵鑑類函』（巻四三七・龍二）に引用されているので、それ以前の類書の可能性もある。

## 47 兼家関雪

藤原兼家が大納言になった時、夢の中で逢坂関を過ぎ深雪を見た。凶兆かと思つたが、占う者は吉夢で明日斑牛が献上されると言い、その通りとなった。大江匡衡に語ると、彼は「大吉の夢だ。逢坂は関で、雪は白い。即ち関白になるだろう」と言い、その通りとなった。

出典は『江談抄』（第一・摂関家の事・31大入道夢想事）。『扶桑蒙求』（巻上・79兼家夢雪）は本書に依る。

## 48 丁固生松

呉の丁固は孫皓に仕え司徒となった。尚書だった時、松が腹の上に生える夢を見て、人に語って言うには、「松は十八公に分解できるから十八年経ったらわしは公になる」と。その夢の通りとなった。

出典は『蒙求』（214「丁固生松」）。この故事は他に『三国志』（巻四八・孫皓伝所引の張勃『呉録』）。『芸文類聚』（巻八八・松。『呉録』所引）『事類賦』（巻二四・松。『呉録』所引）『太平御覧』（巻三九八・古夢。卷九五三・松。共に『呉録』所引）『事文類聚』（後集巻二一・夢。新集巻一・三公）『円機活法』（巻二二・松）『御鑑類函』（巻六二・三公総載。『呉嗣主伝注』所引。巻四二二・松二。張勃『呉録』所引）等に見え、『語園』（巻上・82松ヲ夢ニ見ル事（蒙求））にも引かれている。

## 49 物主笥蛇

大物主神は倭迹々姫命を妻とした。妻は夫が夜にしか来ないので、昼に尊顔を拝したいと願った。そこで、夫は明日櫛笥の中に居ると答え、見ると中に小蛇がいて妻は驚き叫んだ。夫に羞をかかせた妻は陰に箸を突きさして薨じ、その墓を箸墓という。

出典は『日本書紀』（巻五・崇神天皇一〇年九月）。他に『日本紀略』（前篇三・崇神天皇一〇年）にも見える。

## 50 王喬網鳧

後漢の王喬は楚の葉県の令となったが、神仙の術の心得があった。毎月一日、十五日に彼は宮中に来て来た。乗物の気配がないので顕宗（明帝）は不審に思い探らせたところ、南方から飛来する二羽の鳧が彼かということになり、網を張って捕らえたら一足の鳧にすぎなかった。天帝から下された玉棺に沐浴服飾して入って

葬られ、廟を葉君祠という。

出典は『蒙求』（247「王喬双鳧」）。その典拠は『後漢書』（巻八二上・方術列伝第七二上・王喬）にあるが、この故事自体は『白氏六帖』（巻二九・鳧『太平御覧』（巻六九七・鳧。卷九一九・鳧。共に『風俗通』所引）『事文類聚』（前集巻三四・仙。続集巻二〇・履。後集巻四七・鴨（鳧付）。外集巻一四・県尹）『潜確居類書』（巻五六・県令）『群書類編故事』（巻一〇・王喬飛鳧）等諸書に見え、本朝でも『文鳳抄』（巻四・州県）『語園』（巻上・43王喬鳧二乗事）などに採られている。

## 51 有馬不軌

蘇我赤兄は有馬皇子に天皇の三つの過失を説いてクーデターを唆し、皇子が兵を起こすと言った時、偽って承諾し、その夜皇子の居処を軍兵で囲み、一件を奏上した。帝は紀州の藤白坂での絞殺を命じたが、皇子は「岩代の松が枝を引結び……」と詠じ、赦免されんことを祈った。

出典は『日本書紀』（巻二六・齊明天皇四年一月三日）。猶、有間皇子の当該和歌は『万葉集』（巻二・141）に見える。

## 52 吳淞伏誅

漢の時、呉王淞の子である太子が入朝し、皇太子と博奕をして争い殺された。それで父の淞は病と称し入朝しなくなったので、帝は呉王に床几と杖を与えた。景帝三年に淞は反し、東越に敗走し殺されている。

出典未詳。『史記』（巻一〇六・呉王淞列伝第四六）『漢書』（巻三五・荊燕呉伝第五・呉王劉淞）のいずれかであろうが、本書本文が余りに短いので決し難い。他に『十八史略』（巻二・西漢・孝景皇帝）『事文類聚』（前集巻二一・皇太子。巻二二・親王）等にも関連記事が見える。

## 53 宗清去国

弥平左衛門尉宗清は池禪尼の臣秀宗の子で、平治の乱の折、源頼朝を捕らえて清盛に献じ、保護する役となり、十三歳で孤苦の身の頼朝を憐れむ。後に平氏を討った頼朝は宗清の恩を忘れず、報いるべく池頼盛を遣わし鎌倉に招くも、彼は源氏に恩を受けることを恥とし応じなかった。

出典は『日本古今人物史』（巻四・左衛門宗清伝）。猶、宗清のこの逸話は『平家物語』（巻一〇・池の大納言関東下り）『源平盛衰記』（巻四一・忠頼討たる附頼盛関東下向の事）『吾妻鏡』（巻三・元暦元年六月一日）『本朝語園』（巻六・303宗盛西

海)にも見えている。また、本書の後には『扶桑蒙求』(巻中・5宗清有死)にも見える。

#### 54 范蠡泛湖

范蠡は越王句踐に事えて深謀をめぐらすこと二十年。遂に呉を滅ぼし会稽の恥を雪いだ。名声を揚げたらその地位に久しく居るべきではないし、句踐は患いを共にできても、安樂は同じくできないと、彼のもとを去った。

出典は『蒙求』(274「范蠡泛湖」)。そのもとは『史記』(巻四一・越王句踐世家第一〇。巻一二九・貨殖列伝第六九)。猶、「泛湖」に関わる逸話は『芸文類聚』(巻九・湖。『風俗通』所引)『初学記』(巻七・湖。『国語』『徐州先賢伝』所引)『事類賦』(巻一六・舟。『呉越春秋』所引)『事文類聚』(前集巻一七・湖)『潜確居類書』(巻六四・游覧)『測鑑類函』(巻三八六・舟二。『呉越春秋』所引)等諸書に見える。

#### 55 清盛福原

平清盛は小石に『法華経』の一字を写し海に沈めて経島を作り、舟行の便をはかった。そして、福原に都を遷すことを奏上し、治承四年六月に天皇・法皇・公卿や上下貴賤は福原に移った。が、程なく清盛没し、旧都に還幸した。

出典は『平家物語』(巻六・入道病ひの事)兵庫の築島)や『源平盛衰記』(巻一七・福原京の事)巻二六・入道病を得附平家亡ぶべき夢の事)あたりか。猶、幸若舞曲や説経浄瑠璃に「築島」があるが、そこでの清盛は、人々を捕らえて人柱にしようとした悪者となっている。

#### 56 曹操許都

曹操は董卓を討つ時から滎陽に戦い、河内に駐屯し、東郡太守となり東武陽を治め、更に兗州に入つて拠点としてその刺史となり、天子が長安から洛陽に移るや、操は入朝し、天子を許に移した。

出典は『十八史略』(巻二・東漢〈孝献皇帝〉)。

#### 57 源順和名

源順の先祖は弘仁帝より出で、楊院大納言定、中大夫左京兆尹至、そして挙(攀に作るは誤り)と続いて順に至る。彼は博聞強記でよく詩文を作し和歌を詠じた。村上帝は天曆五年に順らに『後撰集』を撰集せしめた。彼は『和名類聚抄』を

著してもいる。

出典は『本朝蒙求』(巻中・43源順博識)。林羅山「題二倭名鈔二」(『新刻倭名類聚鈔』刊行の冒頭文)からの抄出文である。

#### 58 周公爾雅

『爾雅』三巻の釈詁は周公の書であり、他の篇は仲尼・子夏・叔孫通・梁文が増加したもの。郭璞の注によると文字の学には体制・訓詁・音韻があり、訓詁の書には『爾雅』『方言』等があるという。芸文志や経籍志は本書を『孝経』や『論語』の類に入れるが、四庫分類の小学に置くべきものである。

出典は冒頭に記される通り『文献通考』(巻一八九・経籍考一六)。

#### 59 雅経白河

飛鳥井雅経は和歌・蹴鞠の名手で知られる。洛陽白河の最勝寺に名高い桜があり、花の時節になると貴顕が来遊し蹴鞠の催しがあり、雅経も名手だったのでお呼びがかかった。ある時その桜が枯れて他の木に移し変えられたので懐旧の情もだし難く、「馴れなれて見しは名残りの……」歌を詠んだ。歌意を釈するに、長らく白河の花下に遊んできたが、一本も残らなかつたとは、古き昔が恋しく思われてならぬ、ということだ。

出典は『新古今集』(巻一六・1455)であろうか(その注釈類も含む)。猶、雅経のことは『古今著聞集』(巻一・神祇第一・32二条雅経賀茂社の利生を蒙ること)にも見え、『百人一首一夕話』(巻八・参議雅経)でも歌と鞠にすぐれていたことは記すが、この話柄自体を受け継ぐものは他には余りなさそう。

#### 60 裴度緑野

唐の裴度は憲宗の時に宰相をやめて園池を治め、緑野堂・子午橋などのすぐれた別荘を作り、詩人達と暢詠し楽しんだ。穆宗・敬宗(文宗)の時に政の輔佐の任に在ったが特に何もしなかつた。だが、四朝の宰相となつたのでその威光・声望は四方の夷にも達し、唐の使節に見うと彼の安否を問うのが常だった。

出典は『十八史略』(巻五・唐〈文宗皇帝〉)。裴度の伝は『旧唐書』(巻一七〇・列伝第一二〇・裴度)『新唐書』(巻一七三・列伝第九八・裴度)に見え、緑野堂のことは『事文類聚』(前集巻三二・致仕。続集巻六・第宅。外集巻七・留守。新集巻五・部省部)『群書類編故事』(巻一八・人事類「作二緑野堂二」)などにも見えている。

## 61 仲綱惜駿

源仲綱は愛馬樹下（木の下）を清盛の子の宗盛に強要され献上するが、宗盛が馬の額に仲綱と烙印し、怒罵鞭答したので憤激した。茂仁親王の平氏討伐が発覚して頼政・仲綱父子はこれに従い宇治で交戦する。時に仲綱の家臣渡辺競が平氏の陣営に入り、仲綱を怨んでいると訴え、宗盛より一馬を与えられ帰った。そこで仲綱はその馬の額に平宗盛の名を烙印して六波羅に放った。

出典は『平家物語』（巻四・競）か、『源平盛衰記』（巻一四・木の下馬の事、三位入道入時の事）であろう。『本朝蒙求』（巻下・13仲綱木下、14宗盛援延）と話柄はほぼ同じだが、文章はかなり異なる。猶、後の『絵本故事談』（巻五・源仲綱）は『本朝蒙求』を訓読した内容のようだ。

## 62 宋地奪馬

宋の公子地は遼富嶺を愛し家財の十一分の五を与えた。その中に白馬四頭があつたが、宋公は寵臣向魑が欲しがったのでそれを取りあげ、尾とたて髪を赤く染めて与えた。地は怒り魑から取り戻した。恐くなった魑が他国に逃げようとする、宋公は門を閉め泣いて止めた。宋公の同母弟の辰が地に言うには「家財を分け獵に与えておいて、魑を蔑むのは不公平だ。ひとまず逃げなさい。国境を出るまでもなく宋公がお留めになるだろうから」と。そこで地は陳に走ったが、宋公は留めもしなかった。辰は「これでは兄を騙したことになる。国の主だった人と私が逃亡したら宋公は一体誰と暮らされるつもりか」と意見した。

出典は『春秋左氏伝』（定公一〇年）。

## 63 源空稲岡

源空は作州稲岡の人で、その母は剃刀を呑む夢をみて孕み彼を生んだ。四、五歳で挙止西向するので、菩提寺の観覺は弟子としたが、大器とみて延暦寺の源光に推薦。光もまたその俊才を嘆じ、功德院皇円に薦め、十五歳で受戒した。睿空に密乗・大乘律を学び、『往生要集』を見て浄土専念の宗に入り、高倉帝に戒を受け、藤原兼実に召されて浄土のことを問われた。後、讃岐に謫されたが衆生教化の幸いとし、都の大谷に戻って病み、建暦二年正月二五日に仏名を唱え寂した。その二、三日前に紫雲が彼の坊の上に垂れていたという。

出典は『元亨釈書』（巻五・慧解二之四・大谷寺源空）。

## 64 慧遠蓮社

慧遠は雁門樓（婁）煩の人で、若い頃から書を好み、十三歳で遊学して六経・老莊を学び、宿儒英達に心服された。二一歳で江東に渡り中原の寇乱に遭う。時に釈道安の名声を聞いて師事し、その『般若経』の講説に豁然として悟達した。『仏祖統紀』に謝靈運が廬山に至り慧遠に会って心服し、台を築き『涅槃経』を翻読したという。白蓮池を作り、浄土の業を修して白蓮社と号した。

出典は梁の慧皎の『高僧伝』（巻六・義解篇三・晋廬山釈慧遠）でその抄出。末尾の方は『仏祖統紀』（巻二六・蓮社七祖・慧遠）からの引用。

## 65 入鹿覆戸

蘇我入鹿は皇極帝の時大臣となつて政權を牛耳り、奢侈姦虐であつたので人々は目をそむけたが、中大兄皇子と藤原鎌足は同心して、三韓進調の日に入鹿を誅殺した。その日雨水が庭に溢れたので席障で屍を覆った。

出典は『日本書紀』（巻二四・皇極天皇三年正月一日、四年六月八日、二二日）。他に『日本紀略』（前篇七・皇極天皇四年）『扶桑略記』（第四・皇極天皇四年）でも入鹿誅殺から屍を覆うところ迄記されるが、例えば『水鏡』（巻中・皇極天皇）や『本朝蒙求』（巻上・38入鹿姦邪）のように誅殺の記事迄にとどめるのがむしろ一般であろうか。

## 66 董卓然臍

呂布は董卓のお気に入りだったが、些細なことで機嫌を損ない戟を投げつけられた。王充は呂布と結んで董卓を殺そうとし、卓が入朝した時北掖門で兵に討たせた。車から墜ちた卓が布を大声で呼ぶと、「詔あつて賊臣を討つ」と言い卓を刺殺した。卓は三十年分の穀物と山の如き金銀財宝を貯え「うまくいけば天下を、だめでもこの財を守って老いばいい」と言っていたが、屍を市井に曝すことになった。卓は肥満でその臍に大きな燈芯を置きもやしたところ、数日もえたという。

出典は『十八史略』（巻三・東漢〈献帝〉）。他に『三国志』（巻六・魏書六・董卓伝）などにも見える。

## 67 善成河海

四辻善成は順徳院の曾孫で学才豊かにして『源氏物語』に注し、『河海抄』を著した。詳細に解き明かし、引用典拠も詳しく、その書名は仏書に言う「四河入海」に依る。この物語は寛弘の初めに上東門院の侍女の紫式部が著したもので、本

朝女史による最もすぐれた作品である。

出典は特にないか。『本朝蒙求』(巻下・103義成博涉)も善成の『河海抄』に言及するが本書の直接の典拠というほどのものではあるまい。

## 68 方回瀛奎

元の方回は『瀛奎律髓』を撰した。「十八学士登瀛洲」(唐太宗の時文学館を作り房玄齡・杜如晦ら十八人を学士とし、像・賛を書かせ書府に蔵せしめ、天下の人に慕向せしめた。名譽をうる意)「五星聚奎」(『宋史』太祖紀に見え奎は学問・文芸を掌る星で、天下太平を暗示する)、そして、五・七言の近体詩を律、皮骨を得る意を髓に託したのである。

出典は『瀛奎律髓』(序文)。かの書は唐宋の五言七言の近体詩を撰集し、評語や異聞逸事を記しており、明・清刊本・朝鮮刊本等の他に寛文十一年(一六七二)刊の和刻本もある。

## 69 杉子茨田

茨田堤の二処が決壊した時、仁徳帝は夢の中で、武蔵の強頸と河内の茨田杉子二人に河の神を祭らせれば塞ぐことができると告げられた。そこで強頸は水に入り死して堤と成った。杉子は瓠二箇を水中に投じ、その浮沈に依って河神の意を占い、彼は死なずして堤を成すことができた。当時の人はその両処を強頸の断間・杉子の断間と呼んだ。

出典は『日本書紀』(巻一一・仁徳天皇十一年一〇月)。他に『日本紀略』(前篇五・仁徳天皇十一年)『帝王編年記』(巻五・仁徳天皇十一年)にも記されている。

## 70 李広桃蹊

前漢の李広は武帝の時の人で、匈奴は漢飛將軍と呼んで恐れ、数年侵入することにはなかった。四十年間に七郡の太守を歴し、上の賞賜品は配下に分与し、士卒と共に飲食し、士卒は彼に用いられることを楽しんだ。賛に、李將軍は朴訥な田舎人で口のきき方は下手だったが、その亡くなった日には天下の諸人が皆涙した。誠実さが士大夫に信用されていたのだ。諺に、桃花は何も言わないが、その下には自ずと通う小道ができるものだ、と。

出典は『蒙求』(70「李広成蹊」)。彼の伝は『史記』(巻一〇九・李將軍列伝第四九)『漢書』(巻五四・李広蘇建列伝第二四)などにも見え、賛以下の「桃李不言、下自成蹊」の評言は殊に有名で、『芸文類聚』(巻八六・桃)『事文類聚』(後集巻

三一・桃花)『測鑑類函』(巻三九九・桃四)等諸類書に引かれる。

## 71 頼家窃妾

安達景盛は源頼家に仕えていた。彼の愛妾は姿色美しく、頼家は言い寄り、景盛を三河の室平重広討伐に出した隙に彼女を劫奪した。景盛が凱旋して怨みを口にしたので誅殺し、母政子に詰られた。

出典は『吾妻鏡』(巻一六・正治元年七月二〇日、一六日、二〇日、八月一八・二〇日)か。後の『百人一首一夕話』(巻八・鎌倉右大臣実朝)でもかなり詳説されている逸話である。

## 72 康王奪妻

韓朋(或いは韓憑とも)の妻は美人だったので康王が略奪し、朋は怨んだ。それで王が朋を捕らえると、朋は自殺した。その妻も人知れず衣を腐らせ、王と高台に登った時に自ら身を投げ、左右の誰もが留めえなかった。遺書を残して夫と合葬されんことを願ったが、怒った王は間を置いて埋めさせた。ところが墓の二本の梓木は伸び枝と根が各々互いに絡み合い、鴛鴦が棲みつき朝暮に悲鳴した。南方の人は鴛鴦は韓朋夫婦の魂の化したものと思った。

出典は『搜神記』(巻一一)か。猶、この説話は「韓朋賦」としても広く知られ、『法苑珠林』(巻二七・至誠篇第一九・感應緣「宋韓馮妻康王奪」)『搜神記』(所引)『芸文類聚』(巻四〇・冢墓)『搜神記』(所引)『太平御覽』(巻五五九・冢墓三)『搜神記』(所引)『太平広記』(巻四六三)『嶺表録異』(所引)『太平實字記』(巻一一四・濟州鄆城縣・韓憑冢)『搜神記』(所引)『日記故事大全』(巻七・妻道類)等に見え、本朝でも『三国伝記』(巻一・第二六・宋韓憑妻事)『楊鳴暁筆』(巻一三・怨念・21宋韓次夫婦)『新語園』(巻七・13韓朋為二鴛鴦)『官驗記』『嶺表録』『搜神記』の書名を付す)などに特筆されている。

## 73 助種退螻

清原助種が左近衛府で禁護していると、夜に一匹の螻が近づいて来て、毒牙で咬もうとしたが、彼は泰然自若として笛で還城楽を奏でた。音色美しく響き渡り、蛇も聴いているようだったが、俄かに逃げてしまった。それでその笛を「蛇逃」という。

出典は『本朝蒙求』(巻下・7助種蛇逃)か。もともとは『十訓抄』(巻一〇・26伶人助光(元)の笛)『古今著聞集』(巻二〇・魚虫禽獸第三〇・54伶人助元笛を吹

きて大蛇の難を通る事』『古事談』（第六・亭宅諸道・11清原助元、還城楽を吹いて、蛇難を通る事）『続教訓抄』（巻一一下・吹物〈横笛名物等物語〉）『日本古今人物史』（芸流伝巻七・5助元伝）『本朝語園』（巻七・管絃付雜事・363助元遁二蛇之害）等にも見えるが、笛の吹き手は殆ど助元（光とも）となっている。猶、本書の後の『絵本故事談』（巻四・助種）は主人公を助種としており、『本朝蒙求』や本書を継承していると言える。

#### 74 瓠巴躍魚

孫卿子（荀子）が言うに、瓠巴が琴を鼓すと游魚が出て聴き、伯牙が琴を弾ずると六馬が仰ぎ食うという。注に、瓠巴は楚の人で音楽に優れていて、感動させるに十分であることを言う、とある。

出典は『荀子』（勸学篇）か。この故事は『芸文類聚』（巻四四・琴）『白氏六帖』（巻一八・琴）『事類賦』（巻一一・琴）『太平御覧』（巻五七七・琴上）『文鳳抄』（巻六・琴）『測鑑類函』（巻一八八・琴二）等類書にはよく引かれているが、殆どが『列子』所引である。『事文類聚』（続集巻二二・琴）は『荀子』所引であり、『文選』（巻三五・張協「七命八首」其二）所引の李善注に「孫卿子曰、昔者瓠巴鼓琴而鰋魚出聽、伯牙鼓琴而六馬仰秣」とあるのも注意される。

#### 75 泰親焦衣

安倍泰親は占いがよく当たり指神子さすのみこと称された。ある時雷が家に落ち衣服を焦がしたが無事だった。治承三年一月都が震動したので入朝して勘文を奉った。その時平清盛が兵を率い宮中を囲み上皇を鳥羽離宮に幽閉した。翌年五月鳥羽殿ではイタチやネズミが群を成したので、泰親に占わせたところ、「三日にして喜あり、三日にして憂あり」と出た。前者は幽閉を解かれたこと、後者は茂仁親王もちひとの挙兵であった。

出典は『本朝神社考』（下之六・泰親）で、その抄出と一部修正から成るか。この逸話は他に『平家物語』（巻三・法印問答。巻四・高倉宮謀叛）『源平盛衰記』（巻一一・大地震の事。巻一三・鳥羽殿馳の沙汰の事）等にも見える。猶、泰親の他の逸話は『続古事談』（第五）『古今著聞集』（巻一、四、一七）に見える。

#### 76 夏侯読書

夏侯玄は風格高朗で弘弁博暢な人であったが正始年間に曹爽に誅殺された。嘗て柱にもたれ読書していた時、暴雨雷鳴があつてその柱を破り、その衣服を焦がした

が、彼は顔色も変えず読書していた。

出典は『世説新語』（方正第五・6話所引劉孝標注で人物紹介をし、雷鳴で衣を焦がしたことは雅量第六・3話）か。猶、夏侯玄の伝は『三国志』（巻九・魏書九・夏侯玄伝）に見え、衣を焦がした故事も『事文類聚』（前集巻四・雷）『潜確居類書』（巻二・雷）『測鑑類函』（巻九・雷三）等に見える。

#### 77 武正落馬

下野武正は法性寺相公に随い天王寺への途次、山崎を通った時に落馬した。その折は問わず、また山崎を通りかかった時、「ここが武正（落馬）の地か」と言うので「はい」と答えた。やがて彼自身が山崎村を所領にして言うに「この地を武正の処と殿下が言われたからには誰も文句は言えまい」と。

出典は『古今著聞集』（巻一六・興言和口第二五・6下野武正山崎を領知の事并に競馬に負けて酒肴を供する事）。猶、下野武正は他にも様々な逸話を残しており、『古事談』（第六）『今物語』（宇治拾遺物語）（巻八、一五）『十訓抄』（第二）等に見える。

#### 78 葛恪賜驢

呉の諸葛瑾は面長の驢馬顔だった。孫権は一頭の驢馬を牽かせて面に「諸葛子瑜」と題した。その子の恪はそれを請うけ「之驢」と二字を付足したので人々は歎称し、この驢馬を彼に与えた。

出典は『円機活法』（巻二四・驢）か。この故事は他に『三国志』（巻六四・呉書巻一九・諸葛恪伝）『芸文類聚』（巻九四・驢）『初学記』（巻二九・驢）『太平御覧』（巻九〇一・驢）『事文類聚』（後集巻一八・頭面）『測鑑類函』（巻四三五・驢二）等に見え、類書は「呉志」（『三国志』の『呉書』）所引とするものが多く、引用本文も類似する。

#### 79 継信中矢

佐藤継信・忠信は鎮守府將軍秀衡の家臣である。源義経の平氏征伐に際し、二氏を彼に託し、彼らは処々で武功を挙げた。八（屋）島の合戦で継信は群を出でて進み、軍将を護るために矢に中たつて死に、弟忠信は敵を射殺した。

出典は『日本古今人物史』（巻四・6佐藤継信同忠信伝）。忠信らの活躍については『義経記』（巻五）、継信の屋島の合戦での最期は『平家物語』（巻一・屋島）『源平盛衰記』（巻四二・源平侍共の軍附継信光政孝養事）などにも見える。『本朝蒙

求」(巻下・87忠信義男)は本書の記事に通ずるところもあるが直接の関係はないか。

## 80 嵇紹護輿

嵇紹は字を遠、(延の誤り)祖といった。父の嵇康は山濤と仲良しで、誅殺される時、「巨源(山濤)がいるから独りぼっちゃないよ」と言った。濤は彼を秘書丞に推薦した。紹の風貌を見てある人が王戎に言った「氣品があつてまるで鶏の中に一羽の鶴がいるようだった」と。裴顔もまた「もし彼が吏部尚書(人事担当の長)にいたら人材のとりこぼしはなからう」とその器量を認めた。乱の為に惠帝が蒙塵した時行在所に駆けつけ、軍の敗れて崩れる中、いかめしく衣冠を正して身を以て帝の輦を守り防いだ。雨の如き弓矢を受け帝の側で死に、その血は帝の衣に及んだ。乱の鎮定後、帝は彼の死を傷み、衣の血を洗い落とすことなく忠義をたたえ太尉の号を贈った。

出典は『蒙求』(278「嵇紹不孤」)。嵇紹の逸話は『晋書』(巻八九・忠義列伝第五九・嵇紹)に見え、「野鶴在二鶏群」の件は『十七史蒙求』(巻一五・鶴入鶏群)にも採られている。

## 81 押坂喫芝

皇極帝の時、押坂直が一童子を連れて雪上で遊び、菟田山に登ると雪の下から紫菌が六寸ばかり四町程にわたって生えているのが見えた。童子に採らせて隣人に尋ねたが知らず、毒かと疑ったものの、押坂と童子が煮て食べてみるととても良い味だった。翌日行ってみると紫菌は消えていた。二人は菌の羹を食べ無病長寿であった。これは恐らく芝草のことを知らずに菌と言ったものだろう。

出典は『本朝蒙求』(巻下・90押坂喫芝)。そのもとは『日本書紀』(巻二四・皇極天皇三年三月)であり、『日本紀略』(前篇七・皇極天皇三年三月)にも節引されている。

## 82 劉晨飯麻

漢明帝の時、劉晨・阮肇が天台山中に入り迷った。谷川に流れる杯と胡麻飯を見、人里のあるを知り、行くと美女二人に逢い、招かれて手厚いもてなしを受け枕席を勧められる。半年の逗留後彼らが帰還を口にすると、送別の宴を催し送り、指示通りにして帰郷できたが、既に知人はおらず、七代後の子孫を見つけたものの、身を寄せえず、前に戻ろうにも道はわからなくなっていた。

出典は『蒙求』(344「劉阮天台」)。この逸話は他に『続齊諧記』『搜神記』『幽明録』に見え、『法苑珠林』(巻三一・潜遁篇第三三)『芸文類聚』(巻七・天台山。「幽明録」所引)『太平御覧』(巻四一・天台山。巻九六七・桃。共に「幽明録」所引)『太平広記』(巻六一。「神仙記」或いは「搜神記」所引)『事類賦』(巻二六・桃。「幽明録」所引)『群書類編故事』(巻一〇・劉阮天台)『事文類聚』(前集巻一四・衆山。後集巻二五・桃実。共に「搜神記」の所引)『金壁故事』(巻一・胡麻盆裏覚二神仙)等の類書にも見える。

## 83 重衡牡丹

平清盛の子重衡は戦に敗れ捕虜となった。源頼朝はひどく憐れみ千寿の琴瑟で心を慰めたが、彼も善くする琵琶で憂さを晴らした。ある夜重衡が憂いにたえかねて橘直幹の「燈暗数行虞氏涙」を吟ずるのを聞き、頼朝は「弓矢の他にこのような風流もあつたのか」と嘆じた。側近の親義は「平氏には歌才ある者多く、その一族を百花に喩えるなら重衡は牡丹でしょう」と言った。

出典は『本朝蒙求』(巻下・63重衡牡丹)。この逸話のもとは『平家物語』(巻一〇・重衡東下り、千手重衡遊宴)や『源平盛衰記』(巻三九・重衡酒宴附千手伊王の事)に依る。後に『大東世語』(巻三・品藻15)もこの話を受け継ぎ、本書は『扶桑蒙求』(巻上・48重衡琵琶)に影響を与えた。

## 84 昌宗蓮華

則天太后は唐の宗室を殺し、皇帝を称して周と号し、張易之・昌宗兄弟を寵愛した。佞者は「人は昌宗が蓮花に似ていると言うが、蓮花が彼に似ているのだ」と言った。

出典は『十八史略』(巻五・唐(中宗皇帝))。張兄弟のことは『旧唐書』(巻七八・列伝第二八・張易之、昌宗)『新唐書』(巻一〇四・列伝第二九・張易之、昌宗)に見え、この故事は『測鑑類函』(巻四〇七・芙蕖二)にも引かれ、本朝の『新語園』(巻二・41蓮華似三六郎一(旧唐書))にも採られている。

## 85 茂光鳴篳

市允茂光は篳篥で名声があつた。彼が旅途海辺で海賊に遭い「平素音楽を嗜む。是非一曲吹いてから殺してくれ」と言つて奏すると、賊は感嘆し立ち去った。その篳篥を海賊丸という。

出典は『本朝蒙求』(巻上・103)茂光鳴篳、104時光弄笙)。この説話には『発心

集』（第六・70時光茂光数寄天聴に及ぶ事）『源平盛衰記』（巻二五・時光茂光方違ひ盗人の事）『今鏡』（昔語第九・賢き道々）等がもとにあり、『続教訓抄』『体源抄』『樂家録』等にも関わる記事が見える。

## 86 劉琨吹笛

晋の劉琨が晋陽にいた時胡賊に囲まれた。夜中胡笛を奏したところ、胡騎は流涕歔歔して故郷を思い、夜明け前に囲みを棄て立ち去った。

出典は『円機活法』（巻一七・筋）か。末尾の履歴は『十八史略』（巻四・東晋〈中宗元皇帝〉）を利用しているか。この逸話は他に『晋書』（巻六二・列伝第三二・劉琨）『芸文類聚』（巻四四・筋）『世説』所引『太平御覧』（巻五八一・筋）『世説』所引『十七史蒙求』（巻一二・越石清嘯）『事文類聚』（続集巻七・樓閣。巻二三・筋）『潜確居類書』（巻七九・胡笛）『晋書』所引にも引かれる。猶、現在の『世説新語』にはこの話は見えない。

## 87 俊長万軸

紀俊長は書を読み歌に優れ従三品に叙せられた。後小松帝の遊宴に召され、侍従となり内昇殿を許されたが、栄利を求めず出家して南紀に居し宗傑と改名した。数百株の梅林と千茎の竹林があり、竹隠・梅隠と称し、万軸の書籍を楽しみ、酒徒楽友を招き宴遊した。

出典は『日本古今人物史』（巻二・名家伝・5俊長伝）。猶、上記『人物史』は『本朝遼史』（巻下・紀俊長）からの節引。俊長のことは他に『扶桑隱逸伝』（巻下・紀俊長）にも見え、『扶桑蒙求』（巻下・97俊長梅竹）は『遼史』に依っている。

## 88 恵施五車

恵施は多才で蔵書も五車に満ちる程だったが、学問にまともりがなく議論も的はずれだった。事物の意味を検討し十の命題にまとめ、すぐれたものと自負して天下に示した。

出典は『莊子』（雜篇・天下第三三）。猶、恵施五車の話は早く鮑照『擬古詩三首』其三（『文選』卷三二）の李善注に「莊子曰、恵施其書五車、道踳駁也」と見え、『白氏六帖』（巻二六・書籍）『太平御覧』（巻六二・博学）『事文類聚』（別集巻三・蔵書）『円機活法』（巻一一・儲書）『測鑑類函』（巻一九四・書籍四）等類書にも引かれるが、十の命題にまで言及することは殆どない。

## 89 垂仁埴像

野見宿祢は天穗日命十四世の孫で出雲を居としていたが、纏向珠城宮の御宇に詔を奉じて大和に来り、当麻蹶速と相撲をして勝った。その時帝が殉葬に心痛めていたのを知り、彼は土部三百人を率い埴像を造ってそれに代え、土師の姓を下賜された。

出典未詳。但し、前半の野見宿祢の説明は『続日本紀』（天応元年六月二五日。土師古人らの菅原氏への改姓言上文）を用いているか。この相撲のことは『日本書紀』（巻六・垂仁天皇七年七月七日）『日本紀略』（前篇四・垂仁天皇）『河海抄』（巻一七・椎本）などにも見え、『本朝語園』（巻六・324拙力）『本朝蒙求』（巻上・21野見相撲）『絵本故事談』（巻七・野見相撲）に受け継がれ、『見聞談叢』（巻四・312相撲起源）は本朝相撲の権輿とする。また、埴輪のことは『日本書紀』（巻六・垂仁天皇三年七月六日）の他『日本紀略』（前篇四・垂仁天皇）『帝王編年記』（巻四・垂仁天皇三年七月）『水鏡』（巻上・垂仁天皇）等に見えてよく知られ、『本朝蒙求』（巻中・132土師主葬）にも採られた。臆測になるが『本朝蒙求』に本条のヒントがあったか。

## 90 梁武麴牲

梁武帝は夢中に水陸の大斎を行い群靈を済（すく）えと諭され、儀文を作り金山寺で執り行った。『涅槃経』を見、仏の大慈悲を損なう食肉を断ち、生類を棄とせぬよう命じ、郊廟のいけにえには麴（麦粉で作った食物）を代用し、宗廟の祭には蔬果を用いた。

出典未詳。

## 91 赫耶竹胎

竹取翁がある日林中の一竹根に光を見出し、割いて三寸程の小さな美しい女兒を得、掌に乗せて帰り老婆に養わせた。爾來竹を伐る毎に筒の中に金（こがね）を得、次第に豊かになり、竹を採る業は廃した。三ヶ月後女兒は成人し赫那媛と名付けられた。公子や輕薄の徒から花鳥の使いをおくられるが応じず、後に美しさを耳にした帝からも召されたが赴かなかった。媛は月夜のために仰ぎ見て嘯いたりしていたが、忽かに仙女が群れなし天楽を奏し迎えに来て、老夫婦と永訣し雲に乗って去った。

出典は『竹取物語』。猶、竹取翁のこの物語は『今昔物語集』（巻三一・本朝附雑事・竹取翁見三付女兒「養語第三三」）にも見える。かぐや姫の名は『宇津保物語』（内侍の督）『源氏物語』（蓬生・総合・手習）『浜松中納言物語』（巻四）『夜の寝

『覚』（巻一）『狭衣物語』（巻二）『栄花物語』（楚王の夢）など古くから見えているが、『海道記』『古今集為家抄』『古今和歌集序聞書』などの中世書では、かぐや姫は竹林中の鶯の卵から生まれることになっている。

## 92 任氏螺生

任氏の子という貧しいが孝行で知られた人が巨大な螺（たね）を手に入れた。その中に女子がいたので連れて帰った。機織りがうまく、その布を識者は龍須布だと言い、高値で買ったので親を養うに十分であった。

出典は『閩越記』と本書冒頭に記すが、恐らく類書の引用か、未詳。猶、有名な類話に『発蒙記』（束皙撰）『述異記』（任昉撰）『搜神後記』『芸文類聚』（巻九七・螺）『搜神記』所引『初学記』（巻八・嶺南道）『發蒙記』所引『太平広記』（巻六二・『搜神記』所引）『太平實字記』（巻一〇〇・福州侯官県）『搜神記』所引などに見える謝端の白水素女説話があり、『原化記』（皇甫氏撰）『太平広記』（巻八三・呉堪）『原化記』所引『夷堅志』（洪邁撰）に見える呉堪の逸話も類似する。

## 93 義経一谷

寿永二年秋、平氏は幼主を擁して一谷の仮城に拠り、重山林巖の地を得たが、東軍の將源義経は長期戦を好まず、勝れた兵を選び、城背後の高峰懸崖より鹿の跡を認め、駿馬に鞭うち幽谷をくだり敵陣に殺到した。平氏は幼主を護り数艦に乗り移動した。東軍の勝利はこれから始まる。

出典未詳。但し、『平家物語』（巻七・平家一門都落）巻九・鶴越、小宰相身投ぐ事、など）『源平盛衰記』（巻三一・平家都落ちの事）巻三六・一谷城構への事。巻三七・義経鶴越を落す事、一谷落城、など）あたりを背景とする。猶、義経伝については所謂武林伝や『日本古今人物史』（巻一）のようなものにも見え、一谷合戦についても言及はある。

## 94 鄧艾陰平

漢の姜維が魏を攻め、司馬昭は鄧艾・鍾会に反撃させ、鄧軍は姜軍を牽制し戦って敗走せしめ、陰平に到着した。山を掘って道を作り、棧道を架し、鄧は高い山谷では毛氈に身を包み転がるようにして懸崖を下って進軍し、四川に入って諸葛瞻を討ち、鄧が成都に着くと、帝は城を出て降伏したので安樂公に封じられた。

出典は『十八史略』（巻三・三国（後皇帝））。猶、鄧艾と姜維の伝は『三国志』（巻二八・魏書巻二八・鄧艾伝）巻四四・蜀書第一四・姜維伝）にある。

## 95 泰時分財

平泰時は北条義時の子で、清廉慈愛にして論を聞くのを好んだ。ある人が理を説くと喜び感じ入り涙を浮かべるのだった。叔父時房と共に五十条式目を定め、大外記清原教隆に記させた。その政事に私なく、国内は安寧に治められた。父は泰時より弟の朝時・重時を愛した。そこで、彼は父の死後その意を重んじて、朝時に多くの采地を与えたので、人々に褒め称えられた。

出典は『本朝蒙求』（巻上・8泰時悦理）。猶、弟達への分与も含めた彼の為人に触れるものには『洪柿』（明恵上人伝）所引『太平記』（巻三五・北野通夜物語事付青砥左衛門事）『倭論語』（巻五・平泰時）等があり、『神皇正統記』（人巻・後嵯峨院）でも筆を尽くして泰時を絶賛し、『五代帝王物語』でも評価は高い。

## 96 田真伐荊

田真是三人兄弟である。堂の前に紫荆が一株あり、三分割したところ程なく枯れた。兄弟は「本は同じ株だったのに三分したので弱ったのさ。まして、兄弟であるなら互いに思い合い離れるべきではない」と語り合い、株を合わせたところ荊も茂った。

出典は『事文類聚』（後集巻八・兄弟「紫荆枯死」）『続齊諧記』所引であろうか、猶決し難い。この逸話は有名で『芸文類聚』（巻八九・荊）周景式『孝子伝』所引『初学記』（巻一八・離別）『続齊諧記』所引『太平御覧』（巻四二一・義中）巻四八九・別離。共に『続齊諧記』所引。巻九五九・荊。周景式『孝子伝』所引『書言故事』（巻一・兄弟類）『君臣故事』（句解巻二・兄弟類）『日記故事大全』（巻三・友悌類）『金壁故事』（巻五・田真有機能敦睦）等の類書にも採られ、『純正蒙求』（巻上・田真荊花）にも見える。本朝では『今昔物語集』（巻一〇・震旦三人兄弟売家見三荊枯返直住語第二七）『榻鳴曉筆』（第二二・田達兄弟荊）『兼名苑』所引）に田達・田旬・田烟三兄弟のこととして載る。陸機「豫章行」（『文選』巻二八）に「三荊歎同株」とある劉良注にもこの故事が引かれるので早くから知られていたと知れる。

## 97 蒲見焼鳥

仲哀帝は父が崩御し白鳥と化したことを念い、養育する白鳥の貢進を諸国に求めた。越州の使いが白鳥を携え宇治川に宿した時、弟の蒲見別王は何処からの使いか問い、白鳥を焼けば黒鳥になると言い強奪した。越人が訴えると、帝は先王に對し無礼ということで弟を誅した。彼は天（父）を慢り、君（兄）に背いたのであ

る。

出典は『日本書紀』（巻八・仲哀天皇元年一月一日～閏一月四日）。この逸話は『本朝蒙求』（巻下・59浦（蒲）見慢天）にも殆ど同内容で採られるので、それに依ったとみることも可能か。他に『先代旧事本紀』（巻七・天皇本紀・仲哀天皇）『日本紀略』（前篇四・仲哀天皇元年一月一日～閏一月四日）にも見え、『瓊茅餘滴』（巻下・芦髪黒鳥）にも採られている。

## 98 趙高指鹿

趙高は秦の権力を握るために試しに、鹿を二世皇帝に献じ馬だと言ひ、二世皇帝の左右のやはり鹿だと言う者を嚴罰に処した。すると高の過ちを誰も言わなくなつた。これより先、高は「関東の盜賊は何もできない」と言っていたが、秦軍が敗れたので二世が怒るのを恐れ、高はこれを殺して嬰を立て秦王とした。嬰は即位すると趙高一族を殺した。

出典は『十八史略』（巻二・秦（二世皇帝））。猶、これは周知の故事で『史記』（巻六・秦始皇本紀第六）や『芸文類聚』（巻九五・鹿）『太平御覽』（巻九〇六・鹿）『事類賦』（巻二一・馬）『事文類聚』（後集卷三六・鹿）『円機活法』（巻二四・馬）『淵鑑類函』（巻四三〇・鹿二）等の類書にも見える。

## 99 百川不睡

藤原百川は良繼と謀り白壁王を皇太子とし、六二歳で天皇に即け光仁天皇とした。帝は春宮を定めるべく群臣に議論させ、百川は山部皇子を、藤原浜成は稗田親王を推した。帝が決めかねていると、百川は齒をくいしばり殿前に立ち四十日間一睡もせず、「東宮決定までここを退きません」と言い、遂に帝は山部を皇太子とし、帝位に即かせた。これが桓武天皇である。

出典は『本朝蒙求』（巻上・94百川不睡）。この逸話は『水鏡』（巻下・光仁天皇）に詳説される他、『神皇正統記』（地巻）にも百川の「はかりごとめぐらしさだめ申てき」と言及されるところであり、後の、『日本蒙求初編』（巻下・百川忠盡）も話柄は同じである。

## 100 史丹俯伏

前漢の史丹は元帝に仕えた。時に定陶王は才芸があり寵愛されて、一方皇太子は酒色の失態があり、その地位迄廢されかねないと風説にもなっていたので、皇太子の母は不安だった。帝が病み臥せっている時、側に仕えていた史丹は青蒲の上に伏

し「太子を廢するなら臣に死を賜りたい」と涕泣して諫め、結果太子は後嗣となり、成帝となった。

出典は『蒙求』（205「史丹青蒲」）。史丹については『漢書』（巻八二・列伝第五二・史丹）に見え、右の故事の抄引は『芸文類聚』（巻八二・蒲）『太平御覽』（巻九九九・蒲）等にも見える。

## 101 玄昉還郷

玄昉は義淵に唯識を学び、靈龜二年に入唐して智周より法相宗の深旨を稟け、唐帝から紫衣を下賜されて天平七年に帰国した。書五千余卷と仏像等を将来して宮中に献じ、翌年封百戸・田百畝と八人の童子を賜り、九年に僧正となった。一八年に筑紫の觀世音が成り、昉が慶導師となり乗輿して入ると、空中に捉え上げられ見えなくなったが、後日彼の頭は興福寺の唐院に落下した。恐らく藤原広嗣の靈の所為で、その靈は松浦明神である。昉の将来した書は興福寺に納められた。風説に依れば、唐人が彼を占ひ「君は帰国したら身を亡ぼす。この地に留まるにこしたことはない」と言ったので、憚るところあったが、故国への思いたえ難く帰国して、この害に遇つたのだった。

出典は、彼の将来した書が興福寺に納められる迄が『元亨釈書』（巻一六・力遊・興福寺玄昉）、その後の所謂還亡（玄昉と音通）説話は『平家物語』（巻七・玄昉の沙汰）や『源平盛衰記』（巻三〇・大神宮行幸の願附広嗣謀反並玄昉僧正の事）に見えるのに依るだろう。猶、玄昉の説話については他に『統日本紀』（天平一八年六月一八日卒伝）『今昔物語集』（巻一一・玄昉僧正亘レ唐伝三法相一語第六）『扶桑略記』（聖武天皇天平一八年六月五日）『本朝神社考』（中之三・松浦）などにも見え、後の『日本蒙求初編』（巻上・玄昉榮惑・広嗣悲憤）にも受け継がれる。

## 102 岑彭投宿

岑彭は王莽の時に棘陽の長官であったが、漢が兵を起こし棘陽を攻め落とした。その後、彭は武陽に至り、延岑の軍の背後に出て、蜀の人々を驚かせた。公孫述が地面を杖でたたき、彭の营地を「彭亡」と罵り名付け、それを聞いた彭は悪んだが、蜀の刺客に殺されてしまった。だが、その首は武陽へと長驅して軍を維持すること整齊であった。王任貴は彭の威信を聞き遠くから使いを送り降ったが、已に彭は死んでいて、帝は任貴の献上品をすべて彭の妻子に贈った。

出典は『後漢書』（巻一七・馮岑賈列伝第七・岑彭）。

## 103 野篁憑靈

小野篁は詩書に巧みで嵯峨・淳和・仁明・文徳四帝に仕えて参議左大弁となった。承和三年遣唐大使藤原常嗣の下に副使となり、翌年出発したが、大使の第一船が破損し、篁は第三船となったので不満だった。彼は病と称して帰り、文で常嗣を譏った。上皇は御上を軽んずる彼を隠岐配流とした。その折の旅の歌「わたの原八十島かけて……」を友に寄せている。七年に赦され帰洛し、八年に本官に復し、『令義解』編纂の下命を受け、藤（清が正しい）原夏野の下で筆を奮った。下野守の時足利村に学校を建て、仁寿二年五三歳で卒した。

出典は未詳。但し、篁の履歴や遣唐副使の時の不祥事を含む伝は『文徳実録』（巻四・仁寿二年二月二日薨伝）に見え、隠岐配流と詠歌（『古今集』407。『百人一首』）については『今昔物語集』（巻二四・小野篁被レ流隠岐国時読二和歌一語第四五）『撰集抄』（巻八・第五・野相公左遷時詩歌事）や後の『百人一首一夕話』（巻二・参議篁）にも詳しい。また、『本朝一人一首』（巻三・136小野篁『本朝孝子伝』（巻上・5小野篁）『本朝儒宗伝』（巻下・野篁）『本朝語園』（巻四・183篁才芸。巻五・228足利学校）等には足利学校のことも見えている。

## 104 賈誼賦鵬

前漢の賈誼は一八歳で詩を誦し、才学を見出されて文帝に召され博士をつとむ。帝の御下問に際しては老博士達をも感服させた。彼は暦を改め、服色や諸制度を改正すべく上奏した。帝は彼こそ公卿たる人物と思ったが、旧臣の嫉妬に遇い長沙王の太傅に左遷された。長沙生活の三年め、ミミズクが官舎に飛び込んだ。不吉な鳥なので滅入ったが、『鵬鳥賦』を作り心を慰めた。その後都に戻り、帝より鬼神について問われるや詳しく語り、その学問の深さにより梁王の太傅に任じられて、三三歳で没した。孔臧の『鴟賦』に、賈生は有識の士だがミミズクを嫌った、とある。出典は『蒙求』（39「賈誼忌鵬」）。『鵬鳥賦』は『文選』（巻一五）に所収され、彼の伝は『史記』（巻八四・屈原賈生列伝第二四）『漢書』（巻四八・列伝第一八・賈誼）にあり、この逸話は他に『十七史蒙求』（巻六・鵬止誼坐）『潜確居類書』（巻七〇・死喪）などにも抄引される。

## 105 秋津到門

宗岡秋津は奉試登第し、帝より書を賜り感激して大庭に舞い、興に乗じて、月下白髪を書生の姿のまま建礼門に到る。ふと二句を思い得て「今宵奉レ詔飲無レ極、建礼門前舞蹈人」と高吟し、衛士に怪しまれて、自分は新進士老学生の宗岡秋津だと名告ると、ここはそなたのような者の来る所ではないと言われ、彼は驚き謝った。

出典は『本朝蒙求』（巻中・84秋津吟門）。もともとは『江談抄』（第四・75）に見え、『本朝一人一首』（巻八・400）『史館茗話』（13）を経て『本朝蒙求』に至る。本書は『本朝蒙求』に従うが、『本朝語園』（巻四・169秋津至三建礼門）や『本朝世説』（巻下・65）は『史館茗話』に依っている。他に『大東世語』（巻二・文学）や『扶桑蒙求』（巻下・59秋津舞蹈）にも見える。

## 106 夏竦对墀

夏英公の竦は江州の人で、制科に挙げられ对策した。老宦官が呉綾の手巾に詩を乞うたので「殿上袞衣明二日月……」の句を認めた。百官志によると尚書郎は明光殿にて奏上するが、その殿舎の壁には胡粉を塗り古賢烈士が描かれ、床は丹朱で漆ぬりするので丹墀というのである。

出典未詳（恐らく詩話書か）。夏竦のことは『宋史』（巻二八三・列伝第四二・夏竦）に見え、本書に引用される詩は「廷試」（『全宋詩』巻一六一）と題する作。猶後半の「百官志」の引用は『宋書』（巻三九・百官上）からの引用か。『通典』（巻二二・尚書上・歴代郎官）にも類似文が見え、『淵鑑類函』（巻七三・尚書総載三）では蔡質『漢官典職』所引の類似文を挙げている。

## 107 吉平勸杯

安倍清明の子の吉平は占卜を善くした。官医の丹波雅忠と飲み、その杯を挙げた時に、吉平が「すぐにも地震があるから飲み干せ」と言うやいなや大地が揺れ杯酒がひっくり返った。

出典は『古今著聞集』（巻七・術道第九・2陰陽師吉平地震を予知する事）か、それを受ける『本朝語園』（巻七・医陰占相・347吉平知二地震）であろう。猶、『今鏡』（昔語第九・賢き道々）によると、丹波雅忠邸で地震到来を予言したのは有行（晴明の曾孫）で、その通りになった次第を語ったのは実宗（藤原資宗の子）ということになっている。

## 108 張衡造儀

張衡は文を善くし大学に入って五経に通じた。天文陰陽曆算を学んで渾天儀や候風地動儀を造った。地動儀は銅製でさしたし八尺もあり、形は酒樽に似ていた。地が動くとその樽が揺れ、龍形の口から丸い玉が出て、カエル形のものがのみ込み音をふるわせたてする仕掛けで、震源の方向もわかる仕組みだった。遠く隴西の地震

まで察知できたのである。

出典は『後漢書』（巻五九・張衡列伝第四九）か。張衡が地動儀を造ったことは『初学記』（巻五・総載地第一。『統漢書』所引）『潜確居類書』（巻六・地「地動儀」。『統漢書』所引）『測鑑類函』（巻二三・地二。『統漢書』所引）などの類書にも見え、殊に後掲二類書は詳述している。

#### 109 藤綱買炬

青砥藤綱は相模守平貞時に仕えた。俚約質素で慈仁にして人を愛する人であった。夜出かけて滑川で銭十文を落とした。それを取り戻すのに村民達を雇い、松炬代に五十銭程かかったので、ある人が「失うもの甚だ多く、得る所ひどく少ない」と批判した。すると彼は「民に恵み世を治めるということを知らないのか。捜さずいれば落とした銭は永遠に失われたまま何の役にも立たないが、こうして私が銭を出せばそれが民間に流通して役立ち、十銭も戻ってきたからこれも生かせるというので両得さ」と言うと、その人は感服した。

出典は『太平記』（巻三五・北野通夜物語付青砥左衛門事）か。この逸話はその後『倭論語』（巻六・武家部下・青砥誠賢）『本朝蒙求』（巻中・16青砥十銭）『絵本故事談』（巻八・青砥左衛門。『本朝蒙求』に依る）『扶桑蒙求』（巻上・71青砥涉川）『大東世語』（巻一・政事・9話）などに受け継がれ、『譚草小言』（小宮山楓軒著）や『橘窓自語』（橘本経亮著）といった江戸期の随筆類などにも言及がある。猶、青砥藤綱の逸話は『弘長記』に見え、時頼治政を支えたことが知られるが、買炬の故事は見えない。その伝説は井原西鶴『武家義理物語』（巻一・我物ゆへに裸川）や滝沢馬琴の読本『青砥藤綱模稜案』などでも知られている。

#### 110 公儀拔葵

公儀休は魯の相となり、官が民と理を争うことのないようにした。自分の家の野菜が美味ということで葵を捨てさせ、織布が立派に仕上がると怒って婦に暇を出し機を焼いた。そして、「買うべき自分が買わないでいては、農民工女は飯の食い上げだ」と言った。

出典は『統蒙求』（巻二・公儀拔葵）。猶、「拔葵」の故事そのものは『史記』（巻一一九・循吏列伝第五九・公儀休）『芸文類聚』（巻八二・葵）『太平御覧』（巻九七九・葵）等にも見えている。

#### 111 高忠循吏

多賀高忠は応仁の乱の時、京都所司代に任じられた。雑務を掌り人々の訴えを聞き、善政を行って称えられ、その事跡は伝承されている。嘗て朝鮮に使節をやり盟約を交わした。

出典は『日本古今人物史』（巻一・名家伝・6多賀高忠伝）。

#### 112 仲淹良医

范仲淹は刻苦して読書し、六経に通じ進士に及第した。若い時から貧しく、毎日野菜のあえもの（漬物とも）と粥を食べ、秀才の時、天下の人に役立つ人になりたいたいと思い、宰相や名医になれるか占ってもらった。占者はその仁心は宰相にふさわしいと感心した。仁宗の時に右司諫となり、諸州に恵政を施し、延州を治めた時は西方の賊も彼を恐れた。召されて中央で政事に参画して卒し、文正と諡され楚国公に追封された。

出典未詳。但し、占いの逸話を除いた前後の部分（彼の履歴などに関わる）は『古文真宝後集諺解大成』（記類・「岳陽樓記、范希文」の題下注）に依ったものであろう。猶、范仲淹の伝は『宋史』（巻三三四・列伝第七三・范仲淹）にあり、その逸話は『宋名臣言行録』（朱熹撰）にも見える。

#### 113 弘計屯倉

仁賢天皇の弟の弘計（顕宗帝）と億計は父市辺押磐が讒死した時、日下部使主父子に守られ播磨に逃れた。弘計は兄億計に、明石に赴き、屯倉首らに仕えることを勧めた。その地で兄弟の徳行は称えられ、来目部小楯と会した。小楯は皇孫を敬して宮殿を供し、彼が事の次第を都に言上すると、兄弟は迎えられ養育されて、億計は太子に立てられた。天皇没後、億計と弘計は帝位を譲り合い、姉の飯豊青皇女が政を秉ったが、その没後も兄弟は譲り合った。

出典未詳。但し、話の内容は『日本書紀』（巻一五・顕宗天皇即位前紀）に見え、その抜萃と考えても良いか。また、『日本紀略』（前篇五・顕宗天皇）『扶桑略記』（第二・顕宗天皇）『水鏡』（巻上・顕宗天皇）でも知られ、『本朝孝子伝』（巻上・天子・2顕宗天皇）『本朝儒宗伝』（巻一・天皇・4顕宗帝）に継承されている。

#### 114 病已詔獄

前漢の孝宣皇帝の名は病已という。生後すぐ巫蠱（巫術で人心を惑わす）の事件

に巻き込まれ父と共に捕えられた。時に雲氣を占う者が獄中に天子の気があるというので、武帝は使者に獄中の者の皆殺しを命じたが、獄吏の丙吉が拒んだ。病已は学問を好み義氣を喜び、政治の得失を弁えていた。昭帝の時、泰山の巨石が立ち、上林苑の倒木が立ち、蚕が葉を食い「公孫病已立」の五文字が現れた。

出典は『十八史略』（巻二・西漢〈孝宣皇帝〉）。漢の宣帝については他に『漢書』（巻八・宣帝紀第八）に詳しい。

#### 115 柿本明石

人麿は孝昭天皇の皇子天足彦<sup>あたらしくひこ</sup>国押人命<sup>くにおしひとのみこと</sup>の子孫。敏達帝の頃その家に柿樹があったので氏の称としたという。持統・文武朝に仕えた有名な歌人で、滋賀の旧都に感ずる作や雷岳の御遊を頌し、吉野行幸の折は山桜を白雲かと歌い、紀州行幸では小松を結んで後の栄えを願った。長皇子・高市皇子・新田部皇子・弓削舍人・忍坂部皇子・伯瀬部皇女に丹比真人ら当時の貴顕と交遊した。播磨・讃岐・筑紫での旅の詠歌や、とりわけ明石浦の朝霧の舟の歌は絶唱で人口に膾炙する。晩年石見国で没する時に自ら悼む歌を詠み、妻依羅娘<sup>よらのむすめ</sup>女が和している。

出典未詳。但し、『柿本朝臣人麻呂勘文』の記事に近いところもある。また、後の『百人一首一夕話』（巻一・柿本人麿）でも詳説されている。猶、本書で言う明石浦の詠とは「ほのぼのと明石の浦の朝霧に島かくれ行く舟をしぞ思ふ」（『古今集』409）のこと。

#### 116 李老幽谷

老子は母八一歳の時にその左腋から生まれ、李を指<sup>さし</sup>したのでそれを姓とした。周武王の時柱下史となり、九丹・八石・玉醴・金液で心性を養治し、また鬼神を使い、道德を五千言で語った。かつて青牛の車に乗り、徐甲が御者となり、函谷関を通った時、関吏の尹喜は遠くから紫氣を望み見て知り、長生の術を授けられた。

出典未詳。但し、『事文類聚』（前集巻三四・仙「老子之生」）。続集巻三・関市「老子度関」と近い部分もある。老子のことは『史記』（巻六三・老子列伝第三）『神仙伝』（巻一）『列仙伝』（巻上）はじめ、『水経注』（巻一七）『芸文類聚』（巻一九、七八）『初学記』（巻一、二三、八六）『太平広記』（巻二）『太平御覧』（巻九、三六三、三六九、三七〇、六〇二、六一六、六五九、九〇〇）『事類賦』（巻二六・李）『群書類編故事』（巻一〇・老子之生）『仙苑編珠』（巻上）『三洞珠囊』（巻八、九）『三洞群仙録』（巻一）『高士伝』（巻上）『列仙全伝』（巻一）等にも見える。

#### 117 寛蓮金枕

釈寛蓮は肥前摂津の人で俗名を橘良利と言った。出家して寛平上皇に殊遇され、共に囲碁をして金枕を賭けて手にするが、若い郎官に奪われんとして井中に投げ込んだ。後で探ったところ、金箔を貼った木枕であったので郎官が申し上げると、上皇は大笑した。寛蓮はその金枕の資で洛北の弥勒寺を造った。

出典は『本朝語園』（巻五・雑芸・276寛蓮囲碁）。そのもとは『今昔物語集』（巻二四・本朝附世俗・碁打ち寛蓮碁打ちの女にあへる語第六）で、『古事談』（第六・73碁聖寛蓮、醍醐帝に囲碁に勝ち、賭物金の枕にて弥勒寺建立の事）も短いが同じ話柄。猶、良利の名は『大和物語』（第二段）『大鏡』（巻一・宇多天皇）『打聞集』『宝物集』（第三・二六）『十訓抄』（第六・9話）『古今著聞集』（巻二・博奕第一八・2、3話）などに見え、『河海抄』（巻二〇・手習）『花鳥余情』にも記される。後の『扶桑蒙求』（巻上・77寛蓮碁局）は碁の相手が「延喜帝」になっており「古事談」と同じである。猶、大曾根章介「碁聖寛蓮の話」（『大曾根章介日本漢文学論集』第三巻、汲古書院、二〇〇九年）参照。

#### 118 道古博局

李道古は曹成王の皐の子で、うまく宦官にとり入り、口先が達者で人を手なづけ、公卿達と遊んでは博打をしていた。わざと負けると手厚く褒美を与えられたので、利にさとい人は彼を喜ばせた。若い頃は名声もあったが、死んだ時は家を売って葬られた。

出典は未詳。李道古のことは『旧唐書』（巻二二一・列伝第八一・李道古）『新唐書』（巻八〇・列伝第五・太宗諸子・道古）に見えるので、それらからの抄引か。また、『事文類聚』（前集巻四二・碁「偽為レ不レ勝」）は『続世説』（唐・李匡撰）所引でこの道古の逸話を載せる。

#### 119 成範鸚鵡

藤原成範は通憲の子で、罪を得て左遷されたが数年して戻って来た。ある時宮中で女官が「雲の上はありし昔に変はらねど見し玉垂れのうちや恋しき」の和歌を寄せたので、彼は匆卒に焦げた燈心で「そ」の一字を「や」字の傍に書きつけ返答した。このようなスタイルの作を古来鸚鵡返<sup>おうわがえし</sup>と称する。

出典は『十訓抄』（第一・26盛範民部卿の一字の返歌）。猶、『悦目抄』にも見えている。

## 120 謝尚鵠鵠

謝尚は八歳で並外れて賢かった。父が彼の手を引き客人を見送った時、ある人が「この子は座中の（孔子が最も評価した）顔回だね」と言うと、尚は「この場に孔子先生はおられないですから、どうして（多くの弟子の中から）顔回を区別できません」と言い、一座の人を感服させた。王導に召されてその属官となった。王導が宴会で、尚に「君は鵠鵠の舞が上手いんだってね（やつてもらえないか）」と頼むと、彼は早速衣裳と頭巾をつけ、人々に手拍子をとらせ舞いました。

出典は『蒙求』（120「謝尚鵠鵠」）。謝尚の伝は『晋書』（巻七九・列伝第四九・謝尚）に見える。また、前半の座中の顔回の逸話は『日記故事大全』（巻二・生知類「座称三顔回」）『語園』（巻上・8謝尚客二答ル事（蒙求））に、後半の鵠鵠舞は『事文類聚』（続集巻二四・歌曲舞）に見える。猶、『古注蒙求』（『語林』所引）では標題通り鵠鵠の舞のこのみ記す。

## 121 欽明韓像

欽明帝一三年に、百済の聖明王から釈迦銅像や経論・幡蓋等が貢進された。帝は大いに悦び、仏法のようなすぐれた教えはこれまで聞いたことがないとし、群臣に諮ると、仏教を受け入れる蘇我稲目の意見と、蕃神を拝むと国神の怒りを招くという物部尾輿・中臣鎌子の反対意見が出された。帝は試みに稲目に像を与え、彼は向原に寺を建て安置した。

出典は『元亨釈書』（巻二〇・資治表一・欽明天皇）。他に『日本書紀』（巻一九・欽明天皇一三年一〇月）『日本紀略』（前篇六・欽明天皇一三年一〇月）『扶桑略記』（第三・欽明天皇一三年一〇月一三日）にも見え、『本朝蒙求』（巻下・75稲目捨家）『本朝語園』（巻九・釈門・430初渡三仏法）にも受け継がれている。所謂仏教初伝の説話である。

## 122 漢帝竺神

漢明帝が夢に金人を見た。背は丈餘、日の光を帯び、空を飛んでやって来た。群臣に問うと、傳毅が「西域の神で仏と言ひ、長丈六尺、黄金色で軽々と飛ぶというから、それでしょう」と。そこで帝は蔡愔・張騫・秦景・王遵らを天竺にやり、仏經四十二章を写しとらせた。その經典を摩騰・竺法蘭が持ち帰り、蘭台の石室に藏めた。また、白馬寺を建て、摩騰を住せしめて、以後仏法が中国に広まることになった。

出典未詳。但し、ほぼ同じ内容が『芸文類聚』（巻七六・内典）『初学記』（巻二

三・仏、僧、寺）『群書類編故事』（巻一〇・漢明帝迎仏、建寺之始）『事文類聚』（前集巻三五・仏）等の類書にも見え、また、『高僧伝』（巻一・訳経篇上・漢洛陽白馬寺撰摩騰）『法苑珠林』（巻一二・千仏篇第五・後漢明帝時三宝物行）『洛陽伽藍記』（巻四）『魏書』（巻一一四・釈老志）等に見える記事も近い。

## 123 桓威士像

桓武帝が平安城に遷都した時、勅して王都長久の策を議論させた。そこで、八尺の土偶を作り、鉄の甲冑を着せ、鉄の弓矢を持たせて、帝は京の守護神となるよう祈り、東山に埋めた。西向きに立つ今の將軍塚がそれである。

出典は『本朝語園』（巻一・13將軍塚）。もとは『平家物語』（巻五・都遷し）『源平盛衰記』（巻一六・遷都附將軍塚附司天台の事）あたりに依るか。猶、『將軍塚絵巻』も知られ、平安奠都の時に王城鎮護の為に東山山頂に築かれた由来が記されている。

## 124 秦始皇金人

秦王は天下統一し、その功德は三皇五帝にも勝ると、皇帝と号して制詔を定め、朕と自称した。また、諡法を廃し、始皇帝より順次二、三世の計数を以て万世無窮に伝えよ、とした。天下の武器を咸陽に集めて鑄潰し、鐘やそれを吊す台、金人の像を十二造った。重さは各々千石もあった。

出典は『十八史略』（巻二・秦（秦始皇帝））。この関連記事は『史記』（巻六・秦始皇本紀第六）にも見える。

## 125 岑繼改勵

橘岑繼は仁明天皇の外舅右大臣氏公の子である。帝は岑繼を近侍とし寵遇した。彼は身長六尺餘り、遲愚で読書もしなかった。帝が「彼は不才で親戚ではあるが登用できぬ」と言うのを耳にし、心を改め学業につとめた。

出典は『本朝語園』（巻四・才智・194岑繼改勵）。猶、そのもとなつたのは『三代実録』（巻四・貞観二年一〇月二十九日の岑繼薨伝）。

## 126 張充自新

張充は若い頃から自由気儘に遊んでいた。父が休暇で帰郷した時、彼は鷹犬を従え獵をしていたが、遙かに父の姿を見て拝した。父は苦言を呈するが、彼は「三十にして立つと申します。今二十九ですので来年には心を改めます」と言い、その通

り学問に精出し、古籍を博覧して名士となった。

出典不明。但し、『梁書』(巻二一・列伝第一五・張充)『南史』(巻三一・列伝第二一・張裕付充)にはほぼ同内容のことが見えている。

## 127 摂男刈芦

摂津難波に身賤しからぬ夫婦がいたが、貧しく儲えもなく生活に窮していた。離縁して、人に使役される以外生きる手立てがないと男は思い、ましな生活ができるようになったら再会しようと約して別れた。女は都に入り、知人の伝で富家に仕えたが、想うのは旧夫のことばかり。が、その家の主人が妻を亡くし彼女を妻とした。それでも彼女は旧夫が忘れられず、ある日夫に偽り「故郷がひどく恋しく遊びに行きたい」と訴え、下女を従え赴いた。その途次、ボロ衣を纏う憔悴しきつた男が芦の葉を担ぎ通るかかったので、女は呼びとめてそれを買った。簾越しによく見れば旧夫で、女は涙して慙じて悔い、多くの銭を与えて去った。後日女はひそかに和歌と衣帯を贈った。

出典未詳。但し、この話は『大和物語』(一四八段)『今昔物語集』(巻三〇・本朝付雑事・身貧男去妻成二摂津守妻一語第五)『源平盛衰記』(巻三六・忠度名所々々を見る附難波浦賤の夫婦の事)『神道集』(巻七・第四三)等に見え、和歌は『拾遺集』(540・541)『宝物集』(巻三・求不得苦)などにも見えて名高い。世阿弥の「芦刈」(能・謡曲)や御伽草子の「あしやのさうし」、浄瑠璃「摂津国長柄人柱」などもこの物語を背景としており、谷崎潤一郎や海音寺潮五郎にも同題の小説「芦刈」があるのはよく知られているよう。

## 128 買臣売薪

前漢の朱買臣は貧しかったが読書を好み、薪を売りつつ節をつけて誦した。妻は恥ずかしくとめようとするが、聞き入れられず離縁を求めた。すると彼は「自分は五十になったら豊かになる。もう四十を越えたのであと少しだ。恩返しするから待ってくれ」と言ったが、妻は怒り「溝にはまって餓死するのがオチだ」と言うので許した。後に彼は推薦されて武帝の前で講義し、認められて侍中となり、会稽太守に任ぜられた。彼は帝に「富貴にして帰郷しないのは錦の美服を着て夜出かけるようなものだと思うがどうかね」と言われ、帰郷すると、昔の妻とその夫が、太守のお通りということで道路掃除に出ているのに出遭う。彼は夫婦を呼び車に載せて官舎で食を供したが、妻は恥じて首をくくり死んだ。彼は夫に銭を与え葬らせ、旧友を招いて飲食し、恩人達に報いた。

出典は『蒙求』(227「買妻恥醜」)。朱買臣のことは『漢書』(巻六四上・朱買臣列伝第三四)にも見える。この故事は名高く、『芸文類聚』(巻三五・貧。『漢書』所引)『群書類編故事』(巻八・車載故事)『事文類聚』(後集巻一四・夫婦「車載故事」)。前集巻四六・年齒。外集巻一〇・総官府)『日記故事大全』(巻二・学知類「売薪読書」)『金壁故事』(巻五・翁子遭貧志益堅)等の類書にも採られ、本朝の『十訓抄』(第八・9朱買臣の妻)『唐物語』(第一九話・朱買臣を捨てし妻、後に悔やみて死ぬる語)や『新語園』(巻二・13朱買臣妻)などにも見える。

## 129 宝子薬院

称徳帝天平宝字元年二月の勅により、疾病貧乏の徒を救養する為に、越前の壱田百町を山階寺施薬院に寄進し、帝と衆生が病苦を減し延寿の楽しみを保てるよう願った。

出典は『続日本紀』(巻二〇・孝謙天皇天平宝字元年二月八日)。「日本紀略」(前篇一〇・孝謙天皇天平宝字元年二月八日)も同文。猶、施薬院の名称は『江談抄』(第一・40藤氏の氏寺事)『三宝絵』(巻下・13法花寺花嚴会)にも見える。光明皇后が施薬・悲田の二院を作ったことは『元亨釈書』(巻一八・願維三・尼女・皇后光明子)『贈餘雜録』(巻五)『本朝列女伝』(巻一・光明子)『本朝蒙求』(巻上・126光明浴槽)等に見えている。称徳(孝謙)女帝は光明子の娘。

## 130 大観局方

宋の徽宗の大観年間に陳師文らが『太平惠民和剂局方』を撰し奉った。上表文には「昔神農が百薬の味を嘗めて万民の疾を救い……わが宋朝も至仁厚德を以て生類を涵養し……救恤の術有り。……太医局・熟薬所を都に設け……七局を増置して和剂惠民の名称を掲げ……会府に詔して薬局を置かせた」などとある。『文献通考』に『和剂局方』は十巻とあり、鼂氏によると大観中に通医に命じて薬局方の書を校正させたものである。

出典は『太平惠民和剂局方』と『文献通考』(巻二三・経籍考五〇・子(医家))。猶、前者については明刊本が将来されていた他、例えば正保四年(一六四七)、寛文二年(一六七〇)等の和刻本も出版されている。

## 131 金岡図馬

巨勢金岡は詔により紫宸殿の障子に聖賢の像を描いた。彼はまた濃淡の墨汁で山を十五層に描き、遠近も描き分けた。言い伝えでは、金岡が仁和寺の壁に馬を描い

たところ、その後毎夜その馬が近村の禾（いね）を食った。そこで、絵の眼を刺したところ害がなくなったという。

出典は『本朝画史』（巻上・上古画録・巨勢金岡）か。『本朝語園』（巻五・書画・261金岡画図。『高名録』所引）もかなり近く、いずれも『古今著聞集』（巻一・画図第一六・2仁和寺御室に金岡が画ける馬近辺の田を食ふ事）あたりがその源であろう。猶、金岡のことは『菅家文章』（巻一）『源氏物語』（総合）『扶桑略記』（巻二・仁和四年九月二五日）『日本紀略』（前篇二〇）『帝王編年記』（巻一四）『平家物語』（巻一・二代后）『源平盛衰記』（巻二・二代后附則天武皇后の事）『太平記』（巻一二・大内裏造営事附聖廟御事）など、様々な書に断片的に見える。本書に金岡の履歴を記して大納言に至ったとあるのは否。『本朝画史』や『本朝語園』の誤りを継いだもの。

### 132 李王画羊

唐太宗の時、李王が画いた羊を献上した。昼は欄（かひ）の外で草を食い、夜は欄の内に帰り臥すのだった。理由は誰もわからなかったが、僧の賛寧が「これは幻薬のなせることだ。南海の倭国には蚌淚（ばいり）なるものがあり、物に付けると昼見えるが、夜には見えなくなるといふ。また、沃焦山の石を磨（す）って染めると、昼は見え、夜に見えるという」のであった。

出典は『事文類聚』（前集巻四〇・画者。『海外記』所引）。賛寧の言以下については他に『瑯琊代醉編』（巻二四・別画）に類似する記事も見える。

### 133 頼朝再栄

源頼朝は義朝の三男、母は熱田大宮司藤原秀範の女。平治元年に父義朝は藤原信頼と党を組み上皇の宮殿を囲んだが清盛らに誅された。その時頼朝は幼くして父に従っていたが、敗走するところを捕らえられた。清盛の後母の池禪尼が幼い彼を憫れみ清盛に命乞いをして、伊豆蛭島に流罪となる。寿永二年には同族の義仲を征伐して朝恩は年毎に加わり、文治五年に正二位、建久元年には権大納言に任じ右大將を兼ね、三年に征夷大將軍となり、正治元年正月に鎌倉で五三歳で亡くなった。

出典未詳。頼朝の略伝は『扶桑名將伝』（巻二・源頼朝）のような武人伝に見え、池禪尼の件は『平治物語』（巻下・常葉六波羅へ参る事、頼朝遠流の事附盛安夢合の事）にも見えている。

### 134 桓公一匡

齊の桓公は名を小白と言い諸侯の覇者となった。兄の襄公は無道の人だったので多くの弟達はその下（もと）を逃れた。子糾は魯に逃れて（管仲を輔佐とし）、小白は莒（きよ）に逃れ（鮑叔を輔佐とし）た。兄襄公は弟無知に殺され、無知もまた殺されたので、齊の人が小白を君として迎えようとする、魯から軍の出動があった。小白が桓公となるや、鮑叔牙は管仲を推薦し政事を行わせた。桓公が諸侯を九合し天下統一して一匡（乱れを正す）したのは仲の策による。

出典は『十八史略』（巻一・春秋戦国（齊））でその抄出。管仲と鮑叔（牙）のことは『史記』（巻六二・管晏列伝第二）にも見える有名な故事。

### 135 上池三仏

九仏・十仏の業を承けた士仏はやはり医術に通じ、詩歌も嗜んだ。後光厳・後円融・後小松三代に仕えて上池院の号を賜り、法印に叙せられて名声高く、後胤の惟天に至っても益々医名は高く、見立てに優れ奇効も多かった。惟天は足利義輝・織田信長・豊臣秀吉に仕えて寵遇され慶長三年に没した。その子孫は今に至る迄幕府に仕えている。まことに上池の水は尽きることなく、十代餘迄続き、積善の餘慶あるものと言えよう。

出典は黒川道祐『本朝医考』（巻中）。猶、『本朝語園』（巻七・330上池院三仏。『本朝医考』所引）にも見えている。

### 136 馬氏五常

馬良は五人兄弟で皆才名があった。人々は「兄弟の中でも白い眉の者が最も良い」と言ったが、良には眉に白毛があったのだ。劉備が皇帝を称すると、彼は侍中となり東の呉を征討し、武陵では五溪の蛮夷（えびす）を味方につけ、蛮夷の長は劉備からの印綬と称号を受け従った。

出典は『蒙求』（569「馬良白眉」）。馬良の伝は『三国志』（巻三九・蜀書卷九・馬良伝）にある。猶、白眉の故事は他に『十七史蒙求』（巻三・季常白眉）『事文類聚』（後集卷八・兄弟）『潜確居類書』（巻五九・兄弟）等にも見える。

### 137 假夷侑舞

皇極帝の時、蘇我蝦夷（えみし）は大臣となり政權を執行し奢りがあった。己の祖廟を葛城に建て、天子の舞楽とされる八佾の舞を行い、遂には身分をわきまえずに天子と称した。

出典は『本朝蒙求』（巻下・84蝦夷八佾）。勿論『日本書紀』（巻二四・皇極天皇元年是歳条）『日本紀略』（前篇七・皇極天皇元年是歳条）にも見える。

### 138 季孫雍徹

『論語』の中で孔子が言うには、季氏が八佾の舞をやらせているのはがまんならぬし、三家（実力者の家）で「雍」の歌（歌うのは天子の礼とされる）で供物を捧げているのは分を過ぎたものだ、と。朱子の注に、三家とは魯大夫で、孟孫・叔孫・季孫の三公族のこと、「雍」は『毛詩』周頌の篇名で、徹は祭礼が終わる祭器を片付けること。

出典は『論語集註』（八佾第三）。

### 139 顕季影供

歌人藤原兼房は秀歌のないことを無念に思いつつも柿本人麿を想い慕っていた。ある時彼は夢をみる。西坂本に遊び梅花の地に散り敷き香芬々たる傍に、凡庸ならざる一老翁が袍と袴姿に烏帽子をつけ、左手には紙、右手には筆を持ち考え込む風情である。誰かわからぬが、翁が「君が久しくこの人麿を念ってくれているのでこうして出会えたのです」と言うや見えなくなった。彼はすっかり喜び、絵師にその夢を描かせ、壁に掛けて、朝酒を飲みつつ敬拝し、その後はしばしば佳句が得られるようになった。晩年にその人麿は白河帝に献上され、鳥羽の官庫に宝蔵されていたが、顕季が妙工に模写させ、藤原敦光に讃を作らせ、源顕仲に浄書させ、綿繡で表装した。そして、人麿影供なる祭事を行い、酒肴茶果を出し、灯火焚香の下に歌会を開き終日楽しんだ。顕季の三男顕輔の歌才が第一番だったのでこの肖像画が授けられた。

出典は『本朝語園』（巻三・和歌・84人麿影供）。この話は本来『十訓抄』（第四・不レ誠三人上多言等一事・2栗田兼房及び顕季卿の人丸の画像）をもとにしている。猶、人麿影供を行った時の様子は『古今著聞集』（巻五・和歌第六・178修理大夫顕季六条東の洞院亭にて人麻呂影供を行ふ事）にも詳説されている。

### 140 子儀像設

祥符天禧年間（北宋の真宗時代）に楊大年（億）・錢文僖（惟演）・晏元献・劉子儀（筠）らが文章を以て朝廷に在り、皆李義山（商隱）を尚んで西崑体と号した。子儀が義山の像を描き、詩句を写して左右に列ね、貴重とされた。

出典未詳。猶、西崑体についての逸話は『詩人玉屑』（巻一七・西崑体）に見え

ている。

### 141 宗信水藻

藤原宗信は以仁王の乳母の子である。源頼政は以仁王と共に平家討伐を計画したが、発覚して共に宇治に拠つたものの、平知盛軍に敗れ、王も奈良に逃げる途中流れ矢に死し、士卒も死んだ。ただ宗信は新野の池の水藻に隠れ、敵軍の通過を待つて脱出し、都に戻って来たところ、人々に唾をかけられ罵られた。

出典は『本朝蒙求』（巻上・136宗信敵藻）。猶、この逸話は『平家物語』（巻四・高倉の宮最後）や『源平盛衰記』（巻一五・南都騒動始めの事）にも見える。

### 142 無社井経

楚が蕭を討つ時、宋の華叔が蕭を救った。蕭は楚の熊相・宜僚と公子丙を捕虜とした。楚王は軍の撤退を条件に捕虜の解放を求めたが、蕭が捕虜を殺してしまつたので怒り、蕭を滅ぼした。その折、申公巫臣が陣中の兵達が寒そうにしていると楚王に訴えると、王は兵を暖かく励ました。それで兵は綿入れを着たような気になり蕭を討てたのだ。蕭の還無社は楚の司馬卯に声をかけ、友人の申叔展を呼んでもらうと、申は「麦のモヤシはあるか（内憂を救う手立てはあるか）」「山鞠窮はあるか（外患を除く手段はあるか）」と謎かけで聞いてきたので、「ない」と答えた。更に「河魚の腹痛はどうか（都が落城したらどうする?）」と問うので、「空井戸を見て助けてくれ」と還は言った。そこで申は「茅経（ちがやの輪飾り）を掛けろ、井戸で泣いたら俺だ」と答えた。翌日都は落城し、茅輪の空井戸を探し、申叔は還無社を救出した。

出典は『春秋左氏伝』（宣公二三年冬十二月）。

### 143 景時鉞誅

梶原景時はずる賢く口が達者で媚びて源頼朝にとり入り、義経・結城朝光を偽り誘ふなど、彼の讒言毒牙にかかった者は数知らずいた。諸臣は激怒衆議して、景時父子の追放を頼家に請い、聴き入れられた。後に反乱を謀り誅された。

出典は『日本古今人物史』（巻三・姦凶伝・2梶原景時伝）。猶、文中の「源二位」は源頼朝のこと。また、この話柄に関わることは『吾妻鏡』（巻一六・正治元年一〇〜十二月、正治二年正月等）の記事にも見えている。

## 144 商鞅車裂

衛の公孫鞅は秦に来て孝公に謁し、帝道・王道・霸道を論じ、富国強兵を説いた。井田法を廃し、畦道を耕地とし、新たな賦税法を作り、結果として秦は富国強兵の国となった。孝公は鞅を賞し、商・於以下十五の村を領地として与え、商君と呼んだ。孝公の後に恵文王が即位すると、公子虔の仲間が、鞅が反乱を起こそうとしていると讒言したので、彼は秦から逃げようとしたが、旅券も無い身だったから宿にも泊めてもらえず、魏では捕まって秦に送還される始末で、車裂の刑に処せられた。商鞅の法は過酷だった。一步が六尺を越える者を罰し、道に灰を捨てる者は刑せられた。渭水のほとりで刑を決めたことがあったが、その時渭水は真っ赤に染まったという。

出典は『十八史略』（巻一・春秋戦国（秦））。猶、商君公孫鞅のことについては『史記』（第六八・商君列伝第八）に詳しい。

## 145 佐用振巾

大伴狭手彦は詔を奉じ兵を率いて海を渡り高麗を破った。妻は佐用姫といい、別れを悲しんで松浦山に登り、領巾（ひれ）を振り見送って、その山は領巾振山と言われるようになった。

出典は『本朝蒙求』（巻中・100佐用振巾）。この故事は『肥前国風土記』（松浦郡・褶振峯）『万葉集』（巻五・871～875詞書）『興義抄』（巻中・古歌万葉集・一、まつらさよひめ）『林羅山文集』（巻六一・本朝地理志略・肥前国）『本朝女鑑』（巻五・飾義上・狭夜姫六）『本朝列女伝』（巻三）などの諸書に見えて知られる。

## 146 趙婦磨笄

襄子の姉は代王の夫人であった。襄子は既に簡子を葬ったが、まだ喪服を脱がぬうちに北の夏屋山（山西省）に登り代王を招いた。そして、料理人に命じて銅製のひしゃくで代王とその従者を撲殺させ、挙兵して代の地を平定した。姉はこれを聞き泣いて天に叫び、笄を磨き自殺した。代の人々はこれを憐れみ、その死んだ地を磨笄山と命名した。

出典は『史記』（巻四三・趙世家第一三）。

## 147 孝謙姪虐

聖武帝の女の高野姫は光明皇后を母とし、皇位を譲られ孝謙女皇として在位十年。大炊王に禅譲するも、これを廢して淡路に移し、重祚して称徳女帝となり、驕奢姪

虐の振る舞いがあった。藤原仲麻呂を重用し、惠美押勝の号を賜ったが、後に彼は謀反を起こし誅された。また、山階寺の道鏡を呼んで大臣禪師としたところ、道鏡は公卿を蔑視する始末であった。宝龜元年女帝が崩御すると、白壁王が光仁帝となり、先皇の醜聞を慮り、道鏡を下野の薬師寺に貶謫した。

出典は『水鏡』（巻中・孝謙天皇。巻下・廢帝、称徳天皇）か。他に『神皇正統記』（地・第四六代孝謙（第四八代称徳天皇））にも詳述されており、『元亨釈書』（巻二一・資治表三・孝謙皇帝、廢帝。資治表四・高野皇帝）などにも見える。

## 148 則天姦迷

則天武后は一四歳でその美を嘉され唐太宗に召されて後宮に入り、貞觀一年に才人と為る。太宗崩後二四歳で尼になっていたところ、高宗がその寺に行幸し再会した。当時は王皇后と蕭淑妃が寵を争っていたが、王皇后は密かに彼女を還俗させ高宗の後宮に入れた。その結果王・蕭共に寵を失い、武は昭儀に進み、皇后となるや王・蕭を殺した。高宗没後に自分の子の旦を立て、唐の宗室を殺して自ら翌（照に同じ）と名のり皇帝を称して周と国名を改め、僧懷義を寵遇し、張易之・昌宗兄弟を寵愛した。翌が病んだ時、張柬之らが軍を起こし、易之・昌宗を斬り、翌を上陽宮に遷し、則天大聖皇帝の尊号を奉った。

出典は『十八史略』（巻五・唐（中宗皇帝））。

## 149 伊通戲謔

藤原伊通は微官の時より天皇のお側に仕えた。優秀な人で戯れを好み、よく天皇を笑わせた。ある日朝紳が集う時、彼は言った「この頃は武人を褒賞する時、勝敗を問わず、ただ殺した人数の多い者を手柄とするようだが、されば三条殿の井戸もお手柄ということになる。近頃この井戸に墜ちた者がどれ程多かったことか」と。人々は捧腹絶倒した。

出典は『平治物語』（巻上・信西の子息尋ねらるる事附除目の事）か、或いは『今鏡』（藤波の下第六・弓の音）であろう。猶、伊通は世間の風潮に動することなく反骨精神を有し、皮肉・風刺に富んだ言動を行って、『古事談』（第二・臣節・81藤原伊通位官越えられて檳榔を焼く事、伊通昇任異例の事）『十訓抄』（第九・可レ停二怨望一事・8伊通公の辞職）『古今著聞集』（巻五・和歌第六・25伊通公中納言に任ぜられず恨みにたへずして辞職の事）などの説話世界で採り挙げられている。

## 150 淳于滑稽

淳于髡は滑稽多弁な人で諸侯に使いして屈辱を受けたことはない。威王八年に楚が斉を攻めた。斉王は淳于髡を趙に使わし、救援を乞う為賜物に金百斤と馬車十輛馬四十頭を用意した。彼は天を仰ぎ大笑いし、冠纓が切れてしまった。王が「少ないと思うか」と聞くと、彼は「そうは思いませんが」と答える。王は笑った理由を尋ねたので、彼は次のように言う。「東から出た時路傍で豊作祈願しているのを見ました。豚の蹄一つと酒一碗を捧げて、籠や車いっぱい収獲、熟れた穀物が家にあふれるようにと祈っておりましたが、その捧げ物がさやかなのに対し、求めるものが大きいので、思い出し笑いをしたのです」。かくて、斉王は趙への賜物を黄金千鎰・白璧十対・車馬四百頭にふやした。そこで髡は趙に出かけ、趙王は彼に精兵十万と兵車千乗を与えた。それを聞いた楚は夜のうちに兵を引いた。

出典は『史記』(巻一二六・滑稽列伝第六六・淳于髡)。この逸話は他に『群書類編故事』(巻一三・豚蹄禳田)『事文類聚』(前集巻三六・農家)などにも見えている。

## 151 高時聚犬

北条貞時の子高時は相模守に任じ出家して宗鑒という。為人は好き勝手人を軽んじ驕奢だった。猛犬数百匹を聚めて闘わせるのを楽しめとし、諸国に献じさせた。それで競って犬を徴発し、魚鳥を餌にして育て、金の鎖で繋ぐなどして、鎌倉の町は四五千匹の狂犬で充滿した。

出典は『本朝蒙求』(巻下・53高時愛犬)。そのもとは『太平記』(巻五・相模入道弄三田楽・并闘大事)であろう。また、『瓊矛餘滴』(巻下・高時闘狗)でも闘犬好きに触れている。

## 152 元宗闘鶏

元宗が闘鶏を好んだので、貴顕外戚も尚び、貧者も木鶏で遊んだ。識者は、鶏は酉で、元宗の生まれた年を指し、闘は兵を意味し、近々災禍があると思った。

出典は『事文類聚』(後集巻四六・闘鶏)。

## 153 以言紅白

大江以言と紀齊名は共に詩名があり、勅命により「秋末レ出三詩境二」題で献詩した。以言作が優れていたが、「文峰按レ轡駒過影、詞海艤レ舟葉落声」の一聯について、具平親王は各下三字を「白駒影」「紅葉声」に改作すると良いと評した。

出典は『史館茗話』(37話)か、それを出典とする『本朝語園』(巻四・詩文163齊名与三以言一奉二省試二)であろう。もとは『江談抄』(第四・89)で、『袋草紙』(上巻・雑談)『十訓抄』(第七・可レ専三思慮一事・20以言の文峯按レ轡の詩)『東斎随筆』(詩歌類五・39話)『和漢朗詠集私注』(巻二・276)などにも受け継がれ、『本朝一人一首』(巻八・389)『瓊矛餘滴続編』(巻上・以言警聯)にも採られている。

## 154 賈島敲推

賈島は法乾寺の僧だったが、後に進士となった。驢馬に乗り詩句を苦吟して高貴を避けなかった。ある時詩句を吟じて「僧敲月下門」か「僧推月下門」かで迷い、驢上で仕草をしていて、京兆尹の韓愈の行列に行き当たり、左右の者にとりおさえられ馬前で叱責された。賈島が事の次第を申し上げると、愈は「敲」が佳いと言い、共に詩を論じ、身分の隔てなく交友を持った。

出典は『詩人玉屑』(巻一五・孟東野賈浪仙「僧敲月下門」)『劉公嘉話』(細素雜記)所引)か。但し、この故事は好箇の詩話として余りにも有名で、且つかの詩句の見える賈島「題李疑幽居」詩が「三體詩」に所収されたこともあって、その注に引かれることと少なくない。他にこの逸話の主な所収書を挙げれば『唐才子伝』(巻四・118賈島)『増修詩話總龜』(前集巻一一・苦吟門)『唐詩紀事』(巻四〇・賈島)『鑒戒録』(賈忤旨撰)『韻語陽秋』(巻三)『唐摭言』(巻一一)『茗溪漁隱叢話』(野客叢談) (巻六) 等があり、『事文類聚』(前集巻三五・僧。別集巻一〇・詩下)『円機活法』(巻一一・詩)『群書類編故事』(巻一五・賈島推敲)『潜確居類書』(巻八一・詩歌)等の類書にも所収されている。

## 155 時棟小奴

大江時棟はもとは布衣の身分だった。藤原道長がお出かけになった時、通りすがりに駄馬を駆るいかにも天資秀発な重瞳の小童を見かけた。連れ帰り、大江匡衡に習学せしめたところ、広才多芸で、匡衡は己の姓を与えた。

出典は『十訓抄』(巻三・14大江時棟の生ひたち)か、それをもとにしている『本朝語園』(巻四・193時棟重瞳)であろう。

## 156 陸羽遺児

陸羽は所生を知らず、長じて自ら易で占い「鴻漸三于陸二、其羽可三用為レ儀、吉」と出たので陸を姓とし羽を名、鴻漸を字とした。隴西公の幕中に在り東園先生と号した。『因話録』(晩唐趙璘撰)によると、羽は捨て児で、竟陵の龍蓋寺の僧に

育てられ、成人した後その僧が亡くなったのを聞き、「黄金の酒樽を羨まず、白玉の杯を羨まず……」の歌を作った。

出典未詳。猶、彼の姓名のいわれは『新唐書』（巻一九六・列伝第一二二・隱逸・陸羽）『唐才子伝』（巻三・74陸羽）『太平広記』（巻八三・陸鴻漸）『測鑑類函』（巻三九〇・茶二、茶三）などに見え、『因話録』所引の逸話は『唐国史補』（巻中）『唐詩紀事』（巻四〇・陸鴻漸）『太平広記』（巻二〇一・陸鴻漸）等にも見えている。

#### 157 美材写屏

小野美材は翰墨に優れ、白詩を屏風に書し、その後に「太原の居易は古の詩聖、小野美材は今の草神」と書した。その臨池の妙は時人の推すところである。

出典は『本朝蒙求』（巻中・33美材墨妙）。もとは『江談抄』（第五・40美材書二・文集御屏風二事）で、『史館名話』（45話）をへて、『続本朝通鑑』（巻二・醍醐天皇二・延喜元年条末尾小野美材伝）や『本朝世説』（巻下・巧芸・84話）などにも見える。

#### 158 羲之臨池

王羲之は字を逸少という。王承・王悦と共に「王氏三少」と称され、晋に仕えて右軍將軍・会稽内史となった。池に臨んで書を学び池水が尽く黒くなったという。草隸（草書と楷書）は古今に冠たるものである。

出典は『晋書』（巻八〇・列伝第五〇・王羲之）か。猶、本来臨池の故事は王羲之ではなく『蒙求』（320「伯英草聖」）でも知られるように後漢の張芝の故事である。その故事を王羲之が某人に与えた書簡の中で用い「張芝臨池学レ書、池水尽黒」と記していたというのが実際のところである。

#### 159 義家奥賊

源義家は八幡太郎と号する勇力の人で、怒ると頭髮は逆立ち、まなじりが裂けた。騎射にすぐれ、父頼義に従い東奥の貞任・宗任や武衡・家衡を誅した。

出典は『日本古今人物史』（巻一・武將・11源義家伝）。他に前九年の役・後三年の役などでの活躍は史書にも見え、『扶桑名將伝』（巻上・源義家）等の武林伝にも記されるが、本書との直接のつながりはないようだ。

#### 160 裴度淮夷

裴度の威声徳業は郭子儀に匹敵する。四朝三十年に渡って政事に貢献した。元和

一二年一〇月、憲宗は裴度・李愬に命じて呉元済の乱を鎮圧させた。柳宗元はそれを詩に詠み賞美している。

出典未詳。但し、裴度の事蹟は『旧唐書』（巻一七〇・列伝第二二〇・裴度）『新唐書』（巻一七三・列伝第九八・裴度）に見え、前者の方が詳細な記述を有する。猶、本文中に見える郭子儀は安史の乱を平定したことで名高く、後には吐蕃や回紇の軍を撃破した功臣で、徳宗から「尚父」の賜号を贈られた。その病没を知った徳宗は震悼して廃朝五日に及んだという。また、文中の柳宗元詩とは「皇武」「方城」（共に十一章、章八句）で、前者が裴度、後者が李愬を称えたもの。

#### 161 葦姫竹屋

天津彦火瓊々杵尊は天降りて筑紫の日向襲の櫛触二上の峰に居て、大山祇神の女の葦津姫を妻とし、一夜にして身籠もり四児を生み、竹刀で臍の緒を切った。その竹刀を捨てたところが竹林となり、その地を竹屋と呼ぶようになった。

出典は『日本書紀』（巻二・神代下・第九段）。他に『日本紀略』（前篇二・神代下）にも見える。

#### 162 夸父鄧林

夸父は日影を追ひ、喉が乾き河渭に飲むも足らず、北に走って大沢で飲むと思ったが、途中で渴して死ぬ。その時棄てた杖が尸のあぶらにひたされ、数千里の鄧林となった。

出典は『列子』（湯問第五）か。この故事は『北堂書鈔』（巻一三二・杖）『初学記』（巻一・日）『白氏六帖』（巻一・日。巻四・杖）『事類賦』（巻一・日。巻一四・杖）『太平御覧』（巻三・日上）『測鑑類函』（巻二・日三）などの類書では『山海経』（大荒北終）所引で、『事文類聚』（前集巻二・日・「夸父逐日」）『群書類編故事』（巻一・夸父逐日）『円機活法』（巻一・日）では『列子』の所引である。猶、『淮南子』（地形訓）にも見える。

#### 163 河辺臣舶

推古天皇二六年に、河辺臣を安芸国に遣り舶を造らせた。山中に舶の材を求め、好材を得て伐らうとすると、「霹靂木で、伐るべきではない」と言う人があった。が、「皇命に逆らうことはできぬ」と幣帛を捧げて祭り伐らせたところ、大雨雷電にみまわれた。彼は剣を執って「人夫を犯すな。我が身を傷めよ」と訴え、舶を造る役目を果たした。

出典は『日本書紀』（巻二二・推古天皇二六年）か、『本朝蒙求』（巻下・116河辺霽震）であろう。他に『日本紀略』（前篇七・推古天皇二六年）『本朝語園』（巻二・人臣・63河辺臣伐「霽震木」）にも見える。

#### 164 趙道人琴

霽震琴は零凌の湘水の西、霽餘の枯桐から出来ている。枯桐が石上に生じ、その穴の中に蛟龍がいるのだ、と。ある晩雷を受けて焼け、朝に道上に倒れ、民は薪に利用していたが、超（趙）道人は手にして三琴を作った。

出典は『事文類聚』（続集巻二二・琴）。

#### 165 匡房文預

大江匡房は博学で詩歌に優れていた。曾祖の匡衡は博識で知られ、大江家は蔵書も多かったが、匡房は古い書籍が虫に食われるのを恐れ、手入れ整頓した。人がわけを問うと、「私は江家の文預ふみあずかりですから」と答えた。太宰（権）帥となり江帥と呼ばれる。

出典は『本朝語園』（巻四・才智・195江家文預）。もとは『江談抄』（第一・48亡考道心事）であるが、そこで「江家の文預」を自任していたのは匡房ではなく、彼の父成衡である。つまり本話は誤伝であるが、それは『本朝語園』の誤りをそのまま継承しているからである。

#### 166 劉峻書淫

梁の劉峻（字孝標）は博識でありたいと思ひ異書あらば出向いて借りた。崔慰祖は彼を「書淫」と言った。武帝に召されたが、応答かなわず「弁命論」（『文選』巻五四）を著して思うところを述べ、東陽の紫巖山に居し、玄静先生と諡おくりなされた。

出典は『南史』（巻四九・列伝第三九・劉懷珍從父弟峻）、或いは『梁書』（巻五〇・列伝第四四・文学下・劉峻）か。猶、「書淫」の逸話は『事文類聚』（別集巻三・書籍（借書・鬻書）『円機活法』（巻一一・博学）や『何氏語林』（巻八・文学）などに見えている。

#### 167 国基不食

津守国基は住吉神社世襲の神主で和歌や箏に巧みであった。ある歌筵で藤原孝義の秀歌に誰も及ばなかった。国基は帰宅して数日食事もとれず、遂に秀歌「薄墨に書く玉章と見ゆるかなかすめる空に帰る雁が音」をえた。

出典は『袋草紙』（上巻・雑談62）か。猶、「薄墨」の歌は『後拾遺集』（巻一・春上71）に「帰雁をよめる」と題し収められ、『古来風体抄』『和歌口伝抄』にも採られている。また、「孝義」を『袋草紙』は「孝善」とする。

#### 168 東野苦吟

孟郊は自ら昼夜苦吟してやまず、それには鬼神も愁えて「どうして安らかでいらぬのか。心と身が仇敵のようだ」と迄言う始末。韓愈が彼の詩を薦めて「栄華天秀に肖り、捷疾愈響いさよき報こたへぐ」と言ったのはどうだろうか。

出典は『詩人玉屑』（巻一五・孟東野賈浪仙・苦吟）。『増修詩話総龜』（后集巻二〇・苦吟門）にも見え、『詩人玉屑』に同じく『隱居詩話』（宋・魏泰『臨漢隱居詩話』のこと）所引。また、『漁隱叢話』（前集巻一九）にも見えている。

#### 169 天智倭素

斉明帝の御代に唐と新羅が百済を攻め、百済から福信が日本に救いを求めに来た。帝は土佐（筑前の誤り）の朝倉にお出ましになり、東宮に軍令を行わせた。黒木の儉粗な殿舎を山中に建て、美しく椽たるきを削ったり、茅茨を整え切ることをせず、「木丸殿」と言った。帝の崩御するや、太子は素服して政を執り、葬後滋賀宮に即位した。これが天智天皇である。

出典は『本朝蒙求』（巻中・68開別木丸）。猶、木丸殿（黒木御所）のことは『俊頼髓脳』（巻下）や『十訓抄』（第一・可レ定三心操振舞一事・2天智天皇の木の丸殿）などにも見える。『日本書紀』（巻二六・斉明天皇）により時代背景を述べて木丸殿に言及する後統書に『百人一首一夕話』（巻一・天智天皇）がある。

#### 170 孝文郭朴

漢孝文帝の時、露台を作ろうとして見積もらせたところ、百金かかると聞き、帝は中民十軒分の費用だと難色を示した。帝は常に絺衣つじぎを着、夫人にも衣を曳きずるようなことはさせず、幃帳とていも質朴なものにし、天下に範を示した。霸陵の用器も金銀製ではなく瓦器を用いた。

出典は『史記』（巻一〇・孝文本紀第一〇）。他に『漢書』（巻四・文帝紀第四）『芸文類聚』（巻一二・漢文帝）『十八史略』（巻二・西漢（孝文皇帝））にも見える。

#### 171 真備勸業

吉備（下道）真備は元正・聖武・孝謙・光仁朝に仕え、再度入唐してその名は異

国でも知られた。博識名声あり、右僕射となり、唐より帰朝して『唐礼』百餘巻を献上した。軍制についての書もその中に収められていた。そこで天平宝字四年に春日部三閔・土師閔成等十六人を太宰府の真備のもとに派遣し、諸葛孔明の八陣や孫子の兵法を学ばせた。

出典は『本朝蒙求』（巻中・117吉備軍制）。

## 172 李泌嗜学

李泌は七歳で文にすぐれ開元年間に召された。張説は帝と棋を見ていたが、試みに泌に「方円動靜」の文を作らせると立ちどころに成したので、説は「奇童を得られましたね」と帝を祝賀した。張九齡は彼を「小友」として遇した。肅宗の時に金紫を賜い、司馬を拝して賊を討ち、衡山に隠栖して三品の禄と隠士の服を賜った。代宗の時には邸第を賜い、杭州刺史を拝し、徳宗の時には平章事となった。

出典未詳。もっとも李泌のことは『旧唐書』（巻一三〇・列伝第八〇・李泌）『新唐書』（巻二三九・列伝第六四・李泌）に詳しい。奇童の故事は『金壁故事』（巻五・七歳觀棋已知名）『潜確居類書』（巻八四・幼慧）に、「小友」の故事は『事文類聚』（前集巻四四・幼悟）にも見えている。

## 173 貫之蟻通

紀貫之が紀伊国から帰洛する時、その馬が病んで死にそうになった。人々はこの地の神の祟りだという。祈ろうにも幣帛もない。名を問うと蟻通明神と言うので、和歌に「かきくもりあやめも知らぬ大空に蟻通しをば思ふべしやは」と詠んだところ、馬は起ち進んだ。

出典は『東斎随筆』（神道類・61話）か。もとは『貫之集』（第一〇・雑部）『袋草紙』（希代歌・仏神感応歌）あたりで、『楊嶋晩筆』（第一七・1蟻通明神）『和歌威徳物語』（上一・神感・3歌にて神明のとがめをなだめし事）にも採られている。猶、蟻通明神のことは『枕草子』（二二九段「社は」）『俊頼髓脳』『大鏡』（第六・裏書）『奥義抄』（巻中）に見え、謡曲に「蟻通」もある。前掲の貫之歌は他に『古今和歌六帖』（第二・三一九五六）『歌林良材集』（巻下）『雑和集』（巻上）などにも見える。

## 174 韓愈衡嶽

韓愈に「衡嶽廟に謁する詩」があり、「我來りて正に秋雨に逢ふ。陰氣晦昧して清風無し……」という。『一統志』巻六四に、衡州府の衡山は衡山県の西三十里に

在り、五岳の一つだとある。

出典は『事文類聚』（前集巻一三・衡山）か。或いは『韓昌黎集』のような別集や詩話書の可能性もあるか。

## 175 景高執弓

梶原景時には景秀・景高の二子があり共に雄武の人であった。源義経に従い生田の森に戦う時、景高は常に先駆けを心がけていたので、父は使いを遣り制止しようとしたが、景高は「武士のとり伝へたる梓弓ひきては人のかへるものかは」と高吟して馬を進めた。その驍勇ぶりが知られよう。

出典は『平家物語』（巻九・梶原二度の駈）か、『源平盛衰記』（巻三七・景高景時城に入る並景時秀句の事）であろう。

## 176 孟徳横槊

魏武帝の曹操（字孟徳）の子に文帝曹丕と弟曹植がいる。『元氏長慶集』巻五六に「唐故工部員外郎杜君墓誌銘」に「曹氏の父子鞍馬の間に文を為る。往々槊を横たへ詩を賦す」とある。

出典は『元氏長慶集』（巻五六）。猶、この元稹の序は『唐文粹』（巻六九）にも所収される。また、「横槊」は曹氏父子の故事として、『旧唐書』（巻一九〇下・列伝第一四〇下・杜甫）『古文真宝』（後集。蘇軾「前赤壁賦」）等でも用いられている。

## 177 中姫凝鏡

忍坂大中姫命はみずから洗<sup>みで</sup>手水を手に皇子の前に立ち、大王退位後の帝位に即<sup>かたまり</sup>くよう説得するが、皇子は背を向け答えない。退かずにいると、季冬のこととて鏡の水が腕を濡らして凍り、姫が寒さで死にそうになると、皇子は驚いて群臣達の即位の願いを聴き入れた。姫は群臣達に天皇の璽符を奉らせた。

出典は『日本書紀』（巻一三・允恭天皇即位前紀（元年））。他に『日本紀略』（前篇五・允恭天皇）『扶桑略記』（第二・允恭天皇）『水鏡』（巻上・允恭天皇）などにも見え、『本朝女鑑』（巻三・仁智上・忍坂大中姫）『本朝列女伝』（巻一・大中姫）『本朝蒙求』（巻下・93忍坂五剋）などに受け継がれた。

## 178 李后捧匣

章懿李后は初め章献明肅に仕えていた。上<sup>おかみ</sup>が部屋に立ち寄り手を洗おうとした

ので、洗い用具をもって進み出ると、上はその輝く程に美しい彼女を喜び言葉を交わした。后が奏上するに「昨夜羽衣を着た人が素足で空から下りて来て、あなたの子になるって言うんです」と。上は世嗣ぎがなかったので大いに喜び、彼女は召されて孕み昭陵を生んだ。昭陵は靴下が破れると宮中を素足で歩いたので、皆は赤脚仙人と言った。

出典は『揮塵録』（後集巻一・111）。猶、羽衣の人を夢に見た以後の話は『群書類編故事』（巻四・夢・赤脚仙）にも所収されている。

#### 179 軽王獸行

允恭帝の二十三年、太子の木梨輕皇子は同母妹の朝大娘皇女を愛し、許されざる結婚をする。同二十四年六月、帝は御膳の羹汁が凍ったので不思議に思い占わせたところ、二人の結婚が明るみになった。が、太子を罰することはできず、大娘皇女を伊予に移した。

出典は『日本書紀』（巻二三・允恭天皇三年三月、二十四年六月）。他に『日本紀略』（前篇五・允恭天皇）『扶桑略記』（第二・允恭天皇）にも見える。

#### 180 齊襄狐綏

『詩経』齊風「南山」の初めの章に「南山崔々たり、雄狐綏々……」とあり、注に「比なり。南山は齊の南山なり。崔々は高大な貌なり。狐は邪媚の獸、綏々は匹を求むる貌……言わんとするところは、南山に狐がいるとは襄公が高位に居て邪行を行うことを比喩している」ということである。

出典は『詩集伝』（齊風「南山」）。勿論文中の注は朱熹の注である。

#### 181 嵯峨戲字

嵯峨帝は詩文を嗜み、博覧多識で詩賦にすぐれた小野篁は寵遇された。河陽館に行幸した折、「閑閑唯聞朝暮鼓、登樓遙望往来船」と帝が作って、篁に推敲せよとのこと。彼は「遙」を「空」にかえたら益々素晴らしいだろうと申し上げた。すると帝は驚嘆して「これは『白氏文集』の中の句で、もともと「空」とあったものなのだ。そなたと楽天とは才識同一じゃな」と賞賛された。当時『白氏文集』は将来されて官庫に秘蔵されていたが、篁は見えていなかった。

出典は『史館名話』（1話）か、『本朝蒙求』（巻上・100 白垚同情）、或いはそれらの影響を受けた『本朝語園』（巻四・150 嵯峨天皇与篁為文字戲）であろう。もとは『江談抄』（第四・5話）である。猶、この逸話はよく知られて、『仕学斎先生

文集』（巻一）『異称日本伝』（巻上二）『大日本史』（巻二一四・列伝一四一・文学二）『詩轍』（巻四）『作詩質的』『作詩詩教』『悟窓詩話』（巻二）『大東世語』（巻二・文学）『南柯遇夢』（巻二）『柳橋詩話』（巻上）『皇都午睡』（初編下の巻）『百人一首一夕話』（巻二）などにも見える。

#### 182 曹楊読碑

後漢の楊脩は好学俊才で曹操の主簿となった。『語林』に次のように見える。脩は江南に至り「曹娥碑」を読んだ。碑背に「黄絹幼婦外孫壻白」の八字があった。操は意味がわからなかった。解し得た脩にしばし口止めして、考えゆくこと三十里にして思い得て（絶妙好辞の意）、その才学の差を感じたという。

出典は『蒙求』（219「楊脩捷対」）。他に『北堂書鈔』（巻一〇二・碑）『太平御覽』（巻九三・魏太祖武皇帝。巻四三二・聰敏。巻五八九・碑）『潜確居類書』（巻八〇・文章・「絶妙好辞」）では『世説』（捷悟第一・3話）を引き、『群書類編故事』（巻二二・黄絹幼婦）『十七史蒙求』（巻九・楊脩黄絹）は『蒙求』同様に『語林』所引で見えている。猶、『事文類聚』（前集巻六〇・墓銘）は「語林」とあるべきところを「語レ操」と作っている。

#### 183 元信僧正

狩野元信は僧周文・小栗宗丹に画を学んだ。越前守の時、明の鄭沢がその絵を見て称嘆して書を送り、趙昌・馬遠の如き秀れた筆跡で、我が国に来られたら先生の門下生になりましょう、と記した。以後声価益々高く、將軍家の命で鞍馬山僧正像を描くに際しては、その威容を知らず、沐浴し夢見した像を描いた。鞍馬の某僧によると、元信が僧正の像を描いた後に水墨を乾かしていると疾風に飄揚されて空に消えた。すると程なく元信のところへ僧正が妙画の御札に來たという。

出典は『本朝画史』（巻下・専門家族・狩野元信）か、それをもとにする『本朝語園』（巻五下・270 祐勢画二金殿、271 元信画達三大明国、272 元信画二僧正像）によるであろう。

#### 184 道子鍾馗

『逸史』に言う、唐高祖の時、鍾馗は科挙に落ちて死んだ。明皇の夢に、小鬼が玉笛を盗むと大鬼がこれを喰った。帝が尋ねると、「己は南山の進士鍾馗という者で、袍帯の葬を賜ったので天下の鬼を除こうと誓った」と答えた。そこで呉道子に命じてその像を描かせ天下に伝えた。『図絵宝鑑』によると、呉道子は若い頃から

貧しく、洛陽に出て、書を張顥・賀知章に学んだが、思うに任せず、図画の方が巧みだった。その人の性分こそが大切で、多く学べば良いわけではないと悟った。

前半の出典は『逸史』とあるが不明。但し、『事物紀原』（巻八・歳時風俗部・鍾馗）『夢溪筆談』（補筆談卷三・雜誌）『陔餘叢考』（卷三五・鍾馗）などや、本朝の『塵添壺裏抄』（巻一五・39疫治能治事付鍾馗神事）『絵本故事談』（巻四・鍾馗）『事物紀原』所引）等にも見えている。後半は『図絵宝鑑』（巻二・唐）で良からう。猶、吳道子の逸話は『唐朝名画録』『図画見聞誌』『宣和画譜』『西陽雜俎』等にも見える。

### 185 赤人富峰

山辺赤人は柿本人麿と同時代の歌仙。富士の雪を望む秀歌が『万葉集』にある。都良香「富士山記」には「富士山は駿河の国に在り、峰は削成せるが如く、直ちに聳えて天に属す。……蓋し神仙の遊幸する所なり」とある。

出典は『万葉集』（巻三・317山辺宿祢赤人の不尽山を望める歌一首并短歌）と『本朝文粹』（巻一三・371富士山記）。猶、『万葉集』の「田児の浦ゆうち出でて見れば」(318)の歌は『新古今集』（巻六・675）や『百人一首』にも採られている。また、都良香「富士山記」は冒頭の部分からの抄出。本書は末尾「蓋神仙之所二遊幸一也」に作るが、『文粹』本文は「蓋神仙之所二遊幸一也」。

### 186 鄭縈瀾橋

鄭縈はよく歇後詩を作り、世に「鄭五歇後体」と号する。ある人がその詩思を問うと「瀾橋の風雪の中の驢子の上に在り」と答えた。唐の乾寧の初めに宰相となり、縈は頭を搔いて「歇後の鄭五、宰相と作る」と言った。

出典未詳。猶、この逸話に関わることは『新唐書』（巻一八三・列伝第一〇八・鄭縈）『事文類聚』（別集卷九・詩上）や『古今詩話』『北夢瑣言』（巻七）『唐詩紀事』（巻六五・鄭縈）『増修詩話総龜』（前集卷二六・寄贈門）などといった詩話書類にも見えている。

### 187 南北二帝

建武年間に後醍醐帝は京都を出、吉野に皇居を定め崩御した。第七皇子義良が吉野で踐祚し後村上帝となり、その後は子の寛成が即位して長慶院となり、熈成が継ぎ、三種神器は吉野側にあった。一方、足利尊氏は北朝の帝に豊仁を推して光明院とし、二朝併立し、南北朝共に紀元を建てた。

出典は『本朝蒙求』（巻下・101二帝南北）。

### 188 宋魏両朝

宋の高祖武皇帝は劉裕といい彭城の人。漢の元王交の後胤で、晋の禪を受けた。これを南朝と呼ぶ。魏の道武帝は拓跋珪といい、黄帝の子孫と自称し、孝文帝の時に元氏に改正した。こちらを北朝と謂う。南朝は宋の後、齊・梁・陳と伝えられ、北朝は魏に併吞され、後に西魏・東魏に分かれ、東魏は北齊、西魏は後周へと伝え、後周は北齊を併せて隋に伝え、隋は陳をも滅ぼして南北統一した。

出典は『十八史略』（巻四・南北朝（宋））。他に『南史』（巻一・宋本紀上第一、他）『北史』（巻一・魏本紀第一、他）などに関連記事が見える。

### 189 為憲吟囊

源為憲は文章生となり、博識広聞で知られる。作文の会がある毎に一囊を携えて出向いた。そして、気に入った句ができると、その袋の中に頭を突っ込んで吟じるのであった。他人の詩の場合も同様だった。

出典は『本朝蒙求』（巻中・6為憲人囊）。猶、この逸話は『江談抄』（第四・92）に発し、『古今著聞集』（巻四・文学第五・114源為憲大江以言の佳句披講の座にて感泣の事）『史館茗話』（38話）『本朝語園』（巻四・165為憲詩囊）や後の『瓊矛餘滴』（巻中・為憲詩囊）にも見えている。詩人と囊の逸話と言えば、李賀の古錦囊の故事も想起されよう。

### 190 唐求詩瓢

唐末の唐求は詩を吟じ、できると詩藁を丸めて大きな瓢簞の中に投げ入れた。後に病に臥し、その瓢を川に投げて言った。「この瓢を手に入れた者はわしの苦心がわかるう」。瓢は新渠江に流れ至り、見知る者がいて「これは唐求の詩瓢だ」と言った。「鄭処士が隠居に題する」作（以下引用）がある。

出典は『詩人玉屑』（巻二〇・方外）。詩瓢のことは他に『唐詩紀事』（巻五〇・唐球。『茅亭客話』『古今詩話』所引）『増修詩話総龜』（前集卷四六・隱逸門。『古今詩話』所引）『唐才子伝』（巻一〇・270唐求）にも見える。

### 191 等楊墨帚

等楊雲谷は雪舟や楊知客とも称した。幼くして禅林に入り相国寺に学び画をよくした。如拙や周文に師事し、明にも留学した張有声・李在らを師とした。明人が彼

を試して、高い建物の壁に描かせたところ、雪舟は帯に墨をつけて龍を描いた。余りに生き生きと見えたので一座の者は驚いた。中国でも名を馳せ、四明天童第一座の班に昇り、帰朝後は山陽に在って、名刹に画筆を留めている。彼は描く時、酒を飲み、尺八を吹き、和歌を唱え、唐詩を吟じ、無作法に両足を前に投げ出し、筆をなめ墨をつけて紙に対し、意気揚々とまるで龍の水を得たるが如くであった。彼は都で桂悟・彦龍・月翁・蘭坡・正宗・惠鳳・天隠らと親交があり詩文を贈答している。

出典は『日本古今人物史』（巻七・芸流伝・22雪舟伝）。逸話は他に『本朝画史』（巻中・中世名品）にも見える。

## 192 摩詰雪蕉

王維は四季にこだわらず絵にした。だから往々にして桃・杏・芙蓉・蓮花を同じ一景の中に描いたりし、袁安臥雪の図では、雪の景の中に芭蕉が描かれていた。

出典は『円機活法』（巻一八・画）。この話は『夢溪筆談』（巻一七・書画・4話）『事文類聚』（前集巻四〇・画者・「雪中芭蕉」）などにも見える。

## 193 少彦作鰐

少名彦命は造酒の神である。神功皇后の摂政十三年二月に、太子が武内宿禰を従え、角鹿笥飯大神を拜んで戻ると、皇后は彼を宴し祝して「このみきはわがみきならずくしのかみ常世にいますいはたす少名御神のとはき……」と歌った。

出典は『新日本紀』（巻二四・和歌二・神功）。猶、『日本書紀』（巻九・神功皇后摂政一三年春二月）『日本紀略』（前篇四・神功一三年三月八日）などにも関連記事がある。

## 194 杜康造酒

魏武帝「短歌行」に「……何を以て憂へを解かん、惟杜康有るのみ」とある注に、杜康は昔の酒造人とある。『呂氏春秋』では狄儀（儀狄が正しい）が酒を造ったとある。

出典は『蒙求』（221「杜康造酒」）。「短歌行」は『文選』（巻二七）に所収される有名な作でもあり、『芸文類聚』（巻四二・楽府）『初学記』（第一・月）など類書にも所収されること少なくない。また、儀狄造酒の故事は『芸文類聚』（巻七二・酒）『初学記』（巻二六・酒）『事類賦』（巻一七・酒）『事文類聚』（続集巻一三・酒）『円機活法』（巻一五・酒）『潤鑑類函』（巻三九三・酒四）他の殆どの類書に見

え、杜康造酒と共に採り挙げられる。

## 195 実頼汲婢

清慎公藤原実頼は賢相と称されたが、色好みで水汲みの下女に挑んで識者にけなされた。

出典は『本朝語園』（巻八・好色・385小野宮殿不レ忍三女事）。もとの話は『十訓抄』（第七・可レ専三思慮一事・12女事に賢人なし）『古事談』（第二・臣節・39藤原実資女事により藤原頼通の擲楡に赤面の事）『東斎随筆』（好色類・73）『寝覚記』（巻三）『古事談抄』（61話）等に見えるが、主人公は伝承としては清慎公実頼ではなく、小野宮右大臣実資のこととするのが正しい。

## 196 謝鯤織婦

謝鯤は若い時から有名で、高識の持主だったが、威儀に欠け、東海王の下で掾となるも、気儘で物事に拘わらない性格だったので、除名された。彼は清歌鼓琴して意に介さなかった。また、隣家の美女に挑んでは機織の梭を投げつけられて両齒を折り、当時の人に「気まま勝手が過ぎて齒を折った」と評された。後に王敦の下に長史となり、使いとして都に出向き、東宮時代の明帝に会う機会があったが、とても丁寧な対応を受けた。「世間の論者は君を庾亮に比べるがどう思うかね」と東宮が問うと、「朝廷に在ってはとても亮にはかないませんが、丘谷に気儘に遊び楽しむ点では勝っておりましょう」と答えた。

出典は『蒙求』（542「謝鯤折齒」）。猶、謝鯤のことは『晋書』（巻四九・列伝第一九・謝鯤）に見え、隣家の美女へのアタックは『事文類聚』（後集巻一九・齒）『潤鑑類函』（巻二六・齒二）などにも見えている。

## 197 信頼掘戸

平治元年春、藤原信頼は朝恩を誇り大将を望む。上皇が信西に諮り不可としたので、彼は憤慨し、信西を殺すべく源義朝と謀り、清盛熊野参詣のスキを突き反乱を起こし、三条殿を焼き多くの死人を出した。信西は宇治田原に逃れたものの殺された。彼は下僕に穴を掘らせ、中に坐し塞ぎ込め、墳に作って、仏名を唱えつつ命を終えたが、信頼の追手はその墳をあばき、首を斬って持ち帰り巷に曝した。

出典は『平治物語』（巻上・信頼信西不快の事、信西南都落の事、信西の首実検の事）。他に『源平盛衰記』（巻五・小松殿教訓の事）『本朝蒙求』（巻中・93通憲埋土）などにも見えている。

## 198 道子罵首

『世説』によると王孝伯（恭）が死に大桁で首が曝された。司馬道子は出向き首を見つめつつ「お前は どうしてわしを殺そうとしたのか」と言った。注の『続晋陽秋』によると、王恭が拳兵すると左將軍謝琰が討伐に遣わされた。恭は敗れて阿に逃れたが、湖浦の尉により捕らえられた。初め司馬道子は恭と仲良しだったので、車に同乗させ都を出たが、西軍が追ってきたので斬られて梟首されたのだった。

出典は『世説新語』（仇隙篇・7話）。『続晋陽秋』の部分は上記の劉孝標の注の部分の引用である。

## 199 明達啖瓜

生馬仙人は河内の高安の東山の深谷に住んでいた。寛平九年、僧の明達が東山の頂に登り、谷中の一庵を発見し、到ると顔色が黄粟に似た白帽素衣の人がいたので問うと、生馬仙人だった。五つの瓜を達に与え「この地の産物で、飢えをいやすものさ」と言い、食べてみると甚だうまかった。「ここにどれくらいいるのか」と尋ねると、「山に入ってから麓は見えていない（人に会ってない）。ただ仙道を求めているだけさ」と言うばかりだった。

出典は恐らく『本朝神社考』（下之五・生馬仙人）か、そのもとになった『元亨釈書』（巻一八・願維三・神仙）であろう。猶、『本朝列仙伝』（巻二・生馬仙人）『本朝蒙求』（巻下・121生駒白帽）は『元亨釈書』に依っているようであり、後の『絵本故事談』（巻八・生駒仙）は『本朝蒙求』に依っている。

## 200 固言染柳

李固言がまだ科擧に及第していなかった時、古い柳樹の下で指を弾いている音を耳にし、声をかけたところ、「わしは柳の神の九烈君だ。柳の汁を用いてお前の衣を染めろ。及第は間違いないから」と。ほどなく及第した。

出典は『円機活法』（巻二二・柳）。他に『測鑑類函』（巻四一四・楊柳三）にも見え、いずれも『三峰集』所引である。猶、李固言の伝は『旧唐書』（巻一七三・列伝第一二三・李固言）『新唐書』（巻一八二・列伝第一〇七・李固言）に見える。

## 201 弁慶乞刀

武蔵坊弁慶は紀伊熊野神宮別当の弁照の子で、生まれて数月もせず牛を食うかという気があった。幼時に叡山に入り、長じて諍鬭せざる日なく、山を追われて都の遊侠の徒となっていた。千本の刀を得ようと決め、立派な刀の持ち主に強要した。

ある日、牛若丸に出遭い、刀を乞うも「力づくでとってみよ」と笑みつつ言う。少年と侮り、彼は大刀をもって向かうが、牛若は飛捷奮撃し、彼は屈服した。後に君臣となり、彼は牛若に忠節を尽くして側を離れず、衣川の合戦で死んだ。ああ暴悪の人も立派な人となるという点で、あの晋の周処の話と同じであろうか。

出典未詳。但し、『義経記』（第三・熊野別当乱行の事、弁慶生まるる事、弁慶山門を出づる事、弁慶洛中に於て人の太刀奪ひ取る事、弁慶義経に君臣の契約申す事。巻八・衣川合戦の事）の枠内には一応入っているかと思う。勿論弁慶のことは、軍記のみならず、能・舞曲・浄瑠璃などでも知られ、『弁慶物語』『白刺弁慶』などの御伽草子他、街説巷談の類にも広く浸透している。

## 202 管仲射鉤

斉の襄公は無道の人だったので、弟達は災いの及ぶことを恐れ、子糾は魯に逃げ管仲がこれを支えた。また、小白は莒に逃れ鮑叔之が輔佐した。襄公は弟の無知に殺され、彼もまた殺されたので、斉の人は莒より小白を招く。その一方で、魯は兵と共に子糾を送った。管仲はかつて小白を射て帶鉤に当てたことがあったが、小白が即位した時、鮑叔牙は管仲を推薦して政務に当たらせた。

出典は『十八史略』（巻一・春秋戦国（斉））。勿論関連記事は『史記』（巻三二・齊太公世家第二）にも見える。

## 203 政頭二恥

藤原政頭は、その位にあらずして人に対するのは恥、また、求められてもいないのに出かけてゆくのも恥で、この二つの恥を忘れなければ、恥をかくことはない、と言った。

出典は『本朝蒙求』（巻中・45政頭二恥）。そのもとは恐らく『倭論語』（巻四・公卿部下・藤政頭）であろう。

## 204 孫防四休

孫防は大医となり四休居士と号した。黄山谷がその号の意味を問うと、「粗茶淡飯で心足れば休み、衣の破れを繕い寒さを防げれば休み、三つのうち二つが満たされれば休み、食らず妬まず老いて休む」と答えた。山谷はこれこそ安楽の方法だと言った。防には三畝の園があり、花木が茂り、来客があると酒茶を供した。山谷と仲良しで、詩作して家僮に歌わせ、酒茶に興を添えた（以下に詩三首を引用する）。

出典は黄山谷「四休居士詩三首并序」。山谷の詩文集には明・清の刊本や朝鮮古

活字版があり、慶長・元和・寛永年間には和刻本も出ている。

## 205 時頼残醬

平（北条）時頼は、平宣時を召したが来るのが遅れたので、夜だから服装などどうでも良いとせつついた。宣時が来ると、「酒があるので一緒に飲もうと思つてね。肴<sup>さかな</sup>がないが家中捜してみてくれんか」と言うので、宣時は紙燭<sup>あかり</sup>を手に厨房に入り、味噌の残りを得て戻って共に飲を尽くした。古人のつましさはこんな具合で、奢侈を戒めるに足る。

出典は『徒然草』（二二五段）。恐らくは注付の刊本を見ていたろう。

## 206 晏嬰弊裘

晏嬰は齊の景公の時に相となり、肉食を控え、妻にも帛を着せず、一枚の狐裘を三十年用いた。越石父は賢者であったが、牢内に在った。晏は車馬の馬を解いて、それで彼をうけ出して上客とした。太史公は「今晏子が存在していたら、その馬車の御者としてでも仕えたい程に慕っている」と。

出典は『史記』（巻六二・管晏列伝第二）。恐らく『十八史略』（巻一・春秋戦国〈齊〉）に見える晏嬰の記事も一部取り込んでいよう。猶、晏嬰の節儉ぶりは『晏子春秋』（内篇雜下第六）『蒙求』（90「晏嬰脱粟」）『箋注純正蒙求』（巻中・晏嬰狐裘）などにも見え、『淵鑑類函』（巻二八三・儉二、儉三。卷三七四・裘四）にも引かれる。

## 207 朝村籠鳥

上野十郎朝村は九条頼経の下臣で弓射の名手である。嘉禎四年上洛し、一条右府良実邸にて饗宴があった。酒酣<sup>たけな</sup>わにして若宮福王丸の飼う小鳥が籠から逃げ、庭の樹木の間にまぎれてしまつて、捕らえる手立てがない。すると、頼経は「死なぬよう射よ」と朝村に命じた。彼は葉間に半身を現す鳥を矢羽根に挟んで射落とし献上した。籠に戻った小鳥は飛鳴も餌をついばむ様もこれ迄と変わらず、見ていた者達は賛嘆し、彼は頼経から御衣と宝剣を賜った。

出典は『吾妻鏡』（巻三三・嘉禎四年〈暦仁元年〉五月一六日）。後の『絵本故事談』（巻六・朝村）は本書の影響を受けている。

## 208 堯咨葫油

陳堯咨は宋の咸平中の状元で後に知制誥となった。弓矢に精しく「小由基」と号

し家で射ていた。油売りの翁が見て「熟練の技だ」と言った。すると、葫蘆の口を穴あき錢で覆った翁は、ゆつくり杓<sup>しやく</sup>で油を入れ、錢が全くぬれなかったので「わしも熟練だの」と言った。

出典未詳。但し、『群書類編故事』（巻一四・康肅善射）『事文類聚』（前集卷四二・射。「康肅善射」）にも『金坡遺事』を引用して同類の話が記されており、類書の他に『宋名臣言行録』にも見えている。猶、陳堯咨のことは『宋史』（巻二八四・列伝第四三・陳堯咨）参照。

